

TC-50™

取扱説明書

Hello from the Tone Farm

このたびはTRIPLE CROWN™をお買い上げ頂きありがとうございます。そしてMESA/Boogieファミリーへようこそ！

あなたが選んだこのアンプは、ビンテージ・チューブアンプが持つ最上級の品格と、スイッチで切替可能な、革命的な発明であるハイゲイン・チャンネルを併せ持ったモデルとして深い伝統をまとっています。このアンプが持つ完璧な機能性を一目みれば、それがあらゆるものを満載した相手をインスパイアするツールでありながら、その中身はかつてMESAのMARK I™や最初期のモダン・ギターアンプ(偽物にご注意下さい)の革新的な回路や機能の伝統に基づいています。ですから、我々はあなたの選択をお祝いしたいと思います・・・いかなる点でも比類の無い、オリジナルであるこのアンプを演奏すれば誇らしい気持ちになることでしょう！あなたのように！

我々は45年以上に渡って、素晴らしいものを提供することをミュージシャンに対しての真摯な約束として考えており、我々は自分がそうして欲しいと望むように、1人1人の方が対応しており、選択したアンプについて本当に納得してもらえることを保証しています。また我々は、あなたの新しいアンプがあなたを微笑ませ、最初にアンプにプラグインしたものの数分であなたをインスパイアさせる自信があります。ですが本当に喜ばしいことは、最初にお金を払ったことが記憶から消し去られた後に、さらにあなたが新しくそしてインスパイアされるサウンドを発見することであり、TRIPLE CROWNはその真の価値を表し続けるでしょう。

我々は、ご自身のサウンドを実現するためにMESAの製品を選んで下さったことに感謝すると同時に、日々の努力が報われる手助けが出来ることを願っています。この取扱説明書は、それを実現するのに役立つことでしょう。あなたは今、限らない表現力を持つ楽器を手に入れているのです。さあ、遥かなる音楽の旅に出かけましょう。MESAのスタッフ全員があなたを応援します！



目次

使用上の注意	
概要	1-3
演奏を開始するには	4
役立つヒント	5

フロントパネル

GAIN	5-6
MASTER	6
PRESENCE	7
TREBLE	7
MID	7-8
DRIVE/TIGHT	8-9
BASS	9
OUTPUT & SOLO	9-10
POWER	10
STANDBY	10-11

リアパネル

電源コネクター	11
FUSE	11
REVERB	11-12
SOLOスイッチ	12
EFX LOOP(SERIES)	12-13
SPEAKERS	13-14
SPKR ON/SPKR OFFスイッチ	14
HEADPHONE	14-15
LINE OUT	15
CABCLONE™ D.I.	15-17
• CLOSED BACK/OPEN BACK/VINTAGEスイッチ	16-17
• CABCLONE D.I. (XLR OUTPUT)	17
• LIFT/GROUNDスイッチ	17
MESA FTSW	17-18
MIDI THRU/OUT	18
MIDI IN	18
MIDI CHANNEL	18



目次

MIDI使用マニュアル

機能	20
電源の入れ方	20
MESA FTSWジャック	20
MIDI INPUTジャック	20
MIDI THRU/OUTジャック	20
MIDIチャンネル	21
ユーザープリセット	21-22
ユーザープリセット ダンプ(書き出し)&ロード(呼び出し)	22-23
MIDIコントロールチェンジナンバー	23
ソフトウェアアップデート	24
ソフトウェア バージョン SysEx メッセージ	25
TRIPLE CROWNファクトリープリセット	25
FACTORY SAMPLE SETTINGS	26
USER SETTINGS	27
真空管のノイズについて	28-29
スピーカー・インピーダンスマッチングと接続ガイド	30-35
真空管交換チャート	36
PARTS LIST	37

使用上のご注意

この説明書を読んで下さい。

この説明書をなくさない様に保管して下さい。

注意事項を必ず読んでからお使い下さい。

安全事項にも従って下さい。

水の近くで当製品を使用しないで下さい。

汚れた時は乾いた布で拭いて下さい。

換気口を塞がないで下さい。説明書に従って設置して下さい。

暖房機器や、他のアンプなど、熱を発生する機器の近くに置かないで下さい。無理やり、形の違うコンセントに挿さないで下さい。有極プラグは片方のブレードが幅広くなっています。アース付プラグは2つのブレードの他にアース端子も付いています。アースは安全の為のものです。自宅のコンセントに差し込めなかった場合、電力会社に相談して下さい。

電源ケーブルを踏んだり、曲げたりしないで下さい。

落雷の恐れがある時や、長時間使用しない時は電源ケーブルを外して下さい。

修理が必要な時は専門家に依頼して下さい。ケーブルがダメージを受けたり、本体が傷ついたり、濡れたり、落として壊れたりした場合、修理に出して下さい。

換気の為に本体の後ろに必ず10センチ程度のスペースを空けて下さい。換気口の上に新聞、テーブルクロスやカーテン、といった物を置かないで下さい。

ロウソクや火が付くような物を本体の近くに置かないで下さい。

濡れている物も本体の近くに置かないようにして下さい。

注意:安全のため、本体を雨や湿気に晒さないで下さい。

なるべくコンセントの近くに設置して下さい。

注意:必ず適切な接続をしてからアンプを操作して下さい。そうしないとアンプが故障する可能性があります。

直射日光や高い湿度は避けるようにして下さい。

必ずアースを接続して下さい。

解体したり、ヒューズやチューブを交換したりする前に必ず電源ケーブルをコンセントから外して下さい。ヒューズを入れ替える時は、必ず同じタイプのヒューズを使って下さい。

動作中にチューブに直接触れないで下さい。

子供に触らせないで下さい。

故障を避けるため、ケーブルなどを接続する前に電源を切して下さい。

汚れを取るのに溶剤を使用しないで下さい。

必ず本体の裏に表示されている条件を満たすAC電源を使用して下さい。輸出モデルは各国の電圧に合わせてあります。お住まいの規定に従って電源に接続して下さい。

大きな音が出ますので、スピーカーに耳を近づけないで下さい。

Mesa/Boogieアンプはプロスペック用の機材ですので、規定に従って扱って下さい。

上記の取り扱い注意事項と安全管理事項を必ず読んで下さい!



取扱説明書

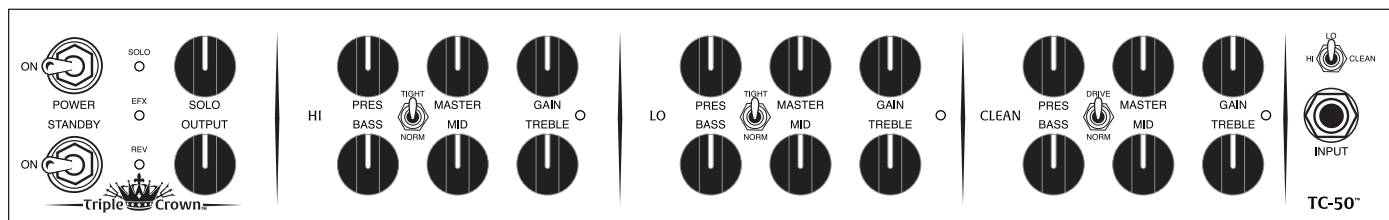
概要：

ここにTriple Crown™ TC-50™を紹介しますが、このアンプはROCKクラシックであるDual Rectifier®ヘッドやTransAtlantics®, Royal Atlantic™そして Electra-Dyne™を発表してきたMESAの持つ"もう一つの側面"が生み出した、間違いなく最も進化したものとなります。

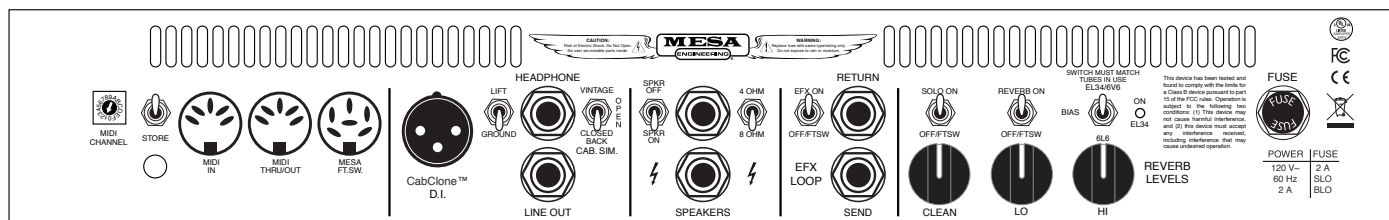
3つのチャンネルは全てのサウンドやスタイルをカバーしており、それは太い低音を伴った甘く弾むようなクリーンから、70年代後半の歌うようなリードサウンドを奏でるミッド・ゲイン・クランチ、さらにコントロールを目一杯にした迫力のあるモダン・ハイゲインサウンドは、ゴージャスな倍音と繊細なタッチのダイナミクスを全て兼ね備えています。

MARKアンプのクリーンサウンドをチャンネル1に、クラシックロック・クランチをチャンネル2に、そしてチャンネル3は、これまでのMESAアンプで最もゲインが高く、Dual Rectifier風のトップエンドですが、より高めの"EL34"の倍音の広がりにより高くタイトになった低音のレスポンスに、MARKアンプの魅力的なボーカルのようなサステインがブレンドされています。そしてこの柔軟性は、我々のラインナップのどれとも似ていないダイレクトなアタックとパンチのあるミッドレンジも同時に持っているのです。

フロントパネル:TRIPLE CROWN™ TC-50™



リアパネル:TRIPLE CROWN™ TC-50™



概要：フロントパネル

チャンネルセレクト

この3-ポジションのミニ・トグルスイッチは、フットスイッチが接続されていないときに、手で3つのチャンネルを切り替えることが出来ます。また選択されているチャンネルがLEDで表示されますのでステージ上での視認に役立ちます。

注意：チャンネル/モードの選択にフットスイッチを使用する際は、トグルスイッチを真ん中のCLEANの位置にして、フットスイッチをリアパネルのMESA FT.SWジャックに接続します。

CHANNEL 1 (CLEAN)

チャンネル1は、クリーンのレスポンスに特化しており、その弾むようなリズムサウンドは、GAINコントロールを高めに設定すると素晴らしい単音のソロ・サウンドを生み出すことも出来ます。さらに中域のブーストとDRIVE機能でコンプレッションを加えることによって、チャンネル1はハードドライブするブルーズ・マシンンとして、ドライブするリズムと唸るようなソロ・サウンドを生み出すことも出来るのです。

CHANNEL 2 (LO)

チャンネル2は、GAIN低めの領域から始まり、中間点までは非常に表現力がある、クリップしてクリーンのエッジのあるレスポンスを持ったサウンドを生み出します。それ以降はより完全な歪みを持ち、ヘビー・クランチ・リズムにも、またはGAINコントロールを真ん中からより高めにしてソロにも適したサウンドにもなります。

CHANNEL 3 (HI)

チャンネル3では、本格的ではありながらコントロールのされた、チャンネル2よりもさらに歪んだ倍音のレイヤーを伴ったサウンドが生み出されます。このチャンネルではGAINコントロールを12時半以下に設定すると最もヘビーなクランチ・リズムに適したサウンドとなり、歌うように滑らかなサステインが得られますが、12時半以上に設定するとよりハイゲインなMARKシリーズのサウンドも得られます。チャンネル3のGAINを最大にすると、これまでのMESAのアンプで最も歪み、かつサステインを持ったサウンドを生み出します。

DRIVE/TIGHT

これらのゲインの違いに加えて、Triple Crownの3つのチャンネル全てにボイススイッチが搭載されています。チャンネル1ではDRIVE、チャンネル2と3ではTIGHTと名付けられていますが、基本的に回路は同じです。名称の違いは、チャンネルのゲイン領域で発生する音の変化に由来しています。ボイススイッチは、ローエンドのレスポンスをタイトにし、またよりタイトかつフォーカスされた中域で少し変化を加えます。実際の効果として、このEQシェイプによって、既に素晴らしいサウンドを持った3つのそれぞれのチャンネルで2つ目のボイスを得ることが出来ます。チャンネル1のDRIVEではソロ演奏の際に吠えるようなブルーズの単音のプレイ、また歪み限界までサウンドをプッシュし中域にアタックを加えることで、エッジの立ったコードプレイに磨きをかけます。チャンネル2のTIGHTではローエンドにフォーカスし、よりくっきりとしたレスポンスが得られるため、ゲイン低めでのブルーズのソロ演奏や、ゲインを高めに設定したNu-Metalのバックিং完璧にマッチします。チャンネル3のTIGHTでは、通常ならばはっきりしないぐちゃぐちゃのサウンドになってしまうレベルのハイゲインな歪みでも、輪郭とフォーカスを加えることが出来ます。DRIVE/TIGHTによって、3つのチャンネルでどこか異なる有効なサウンドが得られる一方、また弦をタッチする際の"感覚"をも変えるので、よりアグレッシブなピッキングテクニックを使うことが可能となり、より容易な演奏や、インパクト・パンチにおいてより表現しやすくなります。

OUTPUT

TRIPLE CROWNは、全体のOUTPUTコントロールを搭載しており、一旦プリアンプのサウンドの設定を完了し、それぞれ独立したチャンネルのMASTERコントロールでチャンネル間のバランスを取った後、1つのノブで演奏時の音量を上げたり下げたりすることが出来ます。OUTPUTコントロールはパワーセクションのDRIVER段のすぐ前に位置しており、エフェクトリターンとしても機能します。

SOLO

このフットスイッチ操作/MIDIプログラム可能な機能は、フットスイッチのSOLOボタン、またはMIDIプログラムナンバーで"ON"で保存することによって、そのどちらでもプリセットでブーストした音量を呼び出すことが出来ます。基本的に追加のOUTPUTコントロールで、直列に配線されているので、OUTPUTで設定された音量よりさらに上に設定出来ます。

概要：リアパネル

REVERB

瑞々しいオールチューブのリバーブは、TC-50の3つのチャンネルを美しい3Dの光で満たしますが、またそれはいつでもフットスイッチで呼び出すことが出来ます。またもしあなたがリバーブを使用するときはこの洗練されたアプローチよりさらにコントロールが必要だとしたら・・・我々はシャーシの真空管側に"隠されたリバーブ・キル"ジャックを用意して、"ダンスを気にしない"人達にトータルコントロールを可能にします。

BIAS スイッチ

昔から好まれていたものとして我々は便利なBIAS(バイアス)スイッチを機能に含め、搭載されているEL34管からより太く丸いサウンドの6L6管に付け替えることが出来ます・・・より温かく丸みのあるレスポンスがお好みの方向けです。6V6管も単にEL34管の設定で真空管を付け替えるだ

けて安全に使用することが出来、"ハーフ・パワー"となるので、より弾けるようなピンチなトーンとまるやかなトップエンドの倍音サウンドを得ることが出来ます。

注意:BIASスイッチは、使用する真空管に合わせた設定になるように注意して使用して下さい。

REVERB, EFX, SOLO スイッチ

これらの3つのミニトグルスイッチは、REVERB(リバーブ)、EFX LOOP(エフェクトループ)、そしてSOLO(ソロ)の機能をONにするものです。これらの機能はミニトグルスイッチまたはMESAのフットスイッチでONにすることが出来ます。またこれらのミニトグルスイッチは、このマニュアルの後半で説明されているMIDIプリセットを行う際にも使用されます。

SPEAKERSジャック

TRIPLE CROWNは、他のMESAアンプと若干異なる方法でスピーカーのインターフェースを行っています。2つの1/4"ジャックは4から16Ωまでの最も一般的なスピーカー抵抗値に対応しています。2Ω抵抗については対応しておらず、またお勧め出来ませんが、それは2Ω抵抗がギター用スピーカーの世界では非常に稀であり実用的でないからです。ミニトグルスイッチは、4Ωと8Ωのどちらかにアウトプットトランスのタップを切り替えますが、そのどちらも最も一般的なスピーカーの抵抗値となります。

SPKR ON/OFFスイッチ

CAB CLONEにはSPEAKER(スピーカー)ON/OFFの機能が搭載されており、サイレントレコーディングやステージパフォーマンス中のイヤール・モニタリングのためにコンソールにダイレクトに接続することが出来ます。TRIPLE CROWNではこのスイッチはリアパネルのスピーカーセクションに配置されており、CabClone DI 回路の一部となっています。

もし他のコントロールやスイッチが音の出る設定であるにも関わらず信号が検出されないとき(スピーカーキャビネットや内部スピーカーを使用)は、このスイッチの設定を確かめて下さい。セットアップやスピーカー接続、またはMIDI情報をプログラムする際に、誤ってこのスイッチをOFFにしてしまうことはよくあることです。また、楽器店でのアンプ試奏の際に、前に試奏したグループがこのスイッチをONまたはOFFにしてしまうこともよくあります。

HEADPHONEジャック

TRIPLE CROWNにはCAB CLONE™ D.I.レコーディング・インターフェースが搭載されており、HEADPHONEアウトでその素晴らしいサウンドを聴くことが出来ます。このスピーカー・シミュレートしたステレオの1/4"アウトはアンプ・パワー部とCAB CLONE DIアウトのスピーカーシミュレート回路を含む全てをキャッチします。また、スピーカーが接続出来ない環境でも優れたサウンドでの楽器練習をすることが出来るので便利です。

CABCLONE™ D.I.

今回TRIPLE CROWNには、人気のあるCAB CLONE™ D.I.レコーディング・インターフェースを搭載しており、マイキングすることなくダイレクト・レコーディングが可能ですが、スピーカーからのサウンドとダイレクトサウンドのミックスも可能です。単体のCAB CLONE™からそのまま引き継がれた機能は以下です:CLOSED BACK(クローズドバック)/OPEN BACK(オープンバック)/VITAGE(ピンチ)切替スイッチは、異なるサウンドスタイルに適応し、優れた順応性を発揮します。その他、XLRバランスアウト(スピーカーMUTE含む)、楽器/LINEレベル切替スイッチ、そしてGROUND/LIFT(グラウンド/リフト)スイッチを装備しています。

注意:SPKR ON/OFFスイッチがONの設定のときは、スピーカーアウトにスピーカーが接続されていることを必ず確認して下さい。接続されていない状態で使用するとアンプにダメージを与える恐れがあり、またその場合は保証対象外となりますので十分ご注意ください。スピーカーや外部抵抗(レジスター等)が無い状態でアンプをSPKR ONで使用すると、アウトプットトランスにダメージを与えたり、アンプが正常に動作しなくなる恐れがあります。

FTSWとMIDI

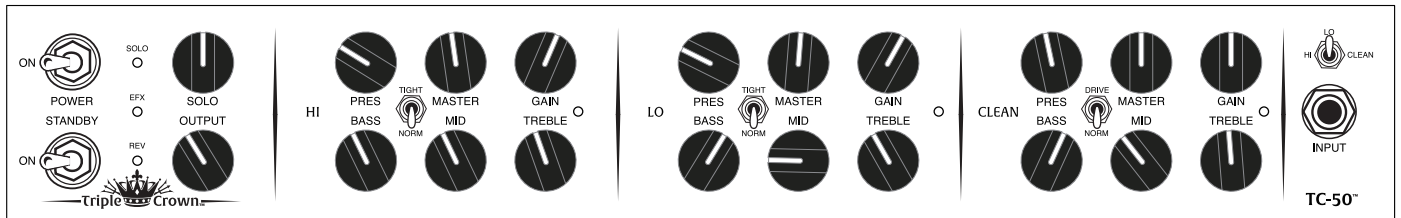
3つのDINジャックが装備されていますが、1つは6ピンのTRIPLE CROWNフットスイッチ用で、2つは標準の5ピンDINジャックでMIDI INとTHRU/OUT用となります。これらを使用すれば、TRIPLE CROWNの素晴らしいサウンドとプロの機能に幾通りもの方法でアクセスすることが出来ます。STORE(ストア)トグルスイッチは、256のMIDIプログラムナンバーに、全てのチャンネルでお好みのサウンドをワンタッチで保存することが出来ます。またMIDIチャンネル・ミニロータリーセクターで、コントローラーの操作で使用するMIDIチャンネルを同期させます。

演奏を開始するには

1. アンプを開梱し、全ての真空管がソケットにしっかりと接続されているかチェックします(運搬中に接続が少し緩くなっていることがあります)。
2. 付属の電源コードをリアパネルの電源コネクタに接続します。
3. TRIPLE CROWNのフットスイッチを開梱し、アンプのリアパネルの右側にあるフットスイッチ用のDINジャックに6ピンのDINケーブルで接続します。もし各チャンネルや機能にMIDIコントローラーを使ってアクセスするときは、コントローラー(またはPC)をTRIPLE CROWNのリアパネルのMIDI INジャックに接続します。
4. 使用するスピーカーキャビネットを、TRIPLE CROWNのリアパネルのスピーカーアウトに接続し、スピーカーのインピーダンスにあわせてインピーダンススイッチを設定します。フル出力(ワット)とベストのトーンバランスが得られるよう、最初は8Ωでのご使用をお勧めします。
5. STANDBY(スタンバイ)スイッチがスタンバイの位置になっていることを確認しながら、POWER(電源)スイッチをONの位置(上側)にして最低30秒間待機します(真空管を高電圧で使用するためのウォーミングアップが目的です)。真空管をより長くお使い頂く為に、コールドスタート時は毎回この手順に従って下さい。
6. エフェクトループを使用する場合は、使用機器を実際に接続する前にこの取扱説明書のエフェクトループの項をよくお読みになり、正しい接続方法や操作について理解するようにして下さい。またエフェクトループを実際に使用する場合は、お使いの機器のINPUTレベルが中ぐらいから低めになっているかチェックして下さい。TRIPLE CROWNのSTANDBYスイッチを上側にしたら、機器のレベルをゆっくり上げて、アンプからのSENDレベルがチャンネルごとに確認出来るかチェックして下さい。
7. 後に出てくるサンプルセッティングを参考に、それぞれのコントロールをこれらに近いセッティングにして、トーンの新しい世界を開いてみて下さい。覚えておいて頂きたいのは、これは数多の可能性の中のほんの1つのセッティング例に過ぎず、あなたのお好みで調整して下さい。
8. STANDBYスイッチをONの位置(上側)にします。あとは演奏を楽しんで下さい!

サンプルセッティング

あなたがまだこの新しいアンプを演奏していないとして、以下はたくさんあるチャンネルのセットアップ方法のほんの一例です。この例では、CLEANで純粋なクリーンサウンド、LOでヘビーなクランチリズム、そしてHIで燃えるようなハイゲインのリードトーンを得る設定になっています。



役立つヒント

注意: 重複する情報について: この取扱説明書を読み進めていくと、重複する情報やセクションが出てくるとはありますが、これは読む人への注意喚起のために繰り返されており、興味のあるセクションしか読まない人に注意を向けてもらうことができ、またTRIPLE CROWNについて知っておかなければならない重要なポイントを繰り返している場合もあります。最初から最後まで漏らさず読む人には申し訳ないとは思いますが、将来この取扱説明書のある部分について素早く参照する際に有効になると思います。

・LOとHIはBASSコントロールを(特にGAIN高めの際に)あまり高く設定しないように注意して下さい。過度にBASSコントロールを上げると、アタックがぼやけてレスポンスが遅くなります。基本的なルールとしては、GAINを上げるときはBASSの設定を下げて下さい。

・各チャンネルにあるGAINとTREBLEコントロールは、最もよく効くトーン・シェイピングコントロールであるため、調節の際は注意が必要です。またそれらはすべてのモードにおいて、アタックの性格やサウンドの方向性のほとんどを決定します。全てのチャンネルで聴くことのできる優れたサウンドの多くは、これら2つのコントロールが中域にあるときに生まれます。

注意: GAINが高めに設定されているときは、金属的な真空管のノイズを発生させないためにTREBLEの設定をあまり高く(2時以上)上げないようにして下さい。

・TRIPLE CROWNを演奏するときは、少なくとも1つのスピーカーキャビネットを床に設置して、その床の上で立って弾いた方がサウンドがより良く聴こえる/感じるかもしれません。アンプ(またはスピーカー)を床に置くと、共鳴効果や、特に低域が伝わることによって、アンプのサウンドが太くなり、また弦の感触をしっかりと感じ取れます。ステージのような木の床だと本当に素晴らしいので是非試してみてください・・・ギターというのは面白い楽器で、2日続けて同じサウンドに聴こえるということがあまり無く、毎夜、また演奏する場所によって異なるように感じますので、あらゆるメリットは活かすべきです。これは大抵の場合に役立ちますが、1つ例外を挙げるならステージ上にたくさんのマイクが設置されているときです。そのような場合は、共鳴したフィードバックを最小限にするためにアンプをステージから高く設定する必要があるでしょう。

・アンプの電源をONにする(しばらく使っていない"コールド"の状態から"ホット"へ)時は、常にSTANDBYスイッチを使用して下さい。それは、演奏セットの合間や、ケーブル接続の合間等、数分でも演奏しない時は常にです。そうすることで、真空管の寿命を延ばすことが出来ます。

・もし他のコントロールやスイッチが音の出る設定であるにも関わらず信号が検出されないとき(スピーカーキャビネットや内部コンボ・スピーカーを使用時は、SPKR ON/OFFスイッチの設定を確かめて下さい。セットアップやスピーカー接続、またはMIDI情報をプログラムする際に、誤ってこのスイッチをOFFにしてしまうことはよくあることです。また、楽器店でのアンプ試奏の際に、前に試奏したグループがこのスイッチをONまたはOFFにしてしまうことも特によくあります。

・MESAの持つもう1つの側面から生み出された回路そしてそのDNAによって、TREBLEとPRESENCEの設定を低めに設定するとより暖かみのあるサウンドが得られます。ギターに使用されている木材やピックアップそして演奏技術にもよりますが、それらのコントロールの設定を12時以下にすると実際素晴らしいサウンドが得られますし、必要であればTREBLEやPRESENCEを反時計回りに回し切ってしまうと、MIDの帯域がかなりの領域をカバーした、トップエンドをカットしたサウンドを得ることも出来ます。

フロントパネル

GAIN

このコントロールはTC-50において間違いなく一番パワフルであり、このセッティングがチャンネルそれぞれのサウンドスタイルや方向性を決定します。呼び出されるチャンネルやモードによって異なるチューブステージのゲインを測定し、インプットステージのヘッドルームにセットされ、サウンドがクリーンになるか歪むかが決まります。またわずかなTONEコントロールとしても機能し、チューブステージのゲインが増減され、サウンドに独自のカラーを与えます。

全てのチャンネルには、3つのGAINコントロールの領域があります。低いGAIN領域は8時～11時半の間で、より暖かく歪んでいるのが11時～2時、そしてより高いGAIN領域が2時半～5時です。どの領域も多様な用途に使用でき、コード演奏でも単音のソロ演奏にも対応します。またGAINコントロールはその領域全体をスイープしますので、異なったフィーリングとトーンのキャラクターを持ちます。

概して、チャンネルまたモードの両方でGAINコントロールが低いとき(8時半から11時半)は音がブライトになり、よりオープンなキャラクターとダイナミクスを生みます。この領域はクリーンサウンドに優れており、CLEANでは最大のヘッドルームが生み出す輝くコードサウンドが得られ、トップエンドの倍音が弾けてアタックがとて速くなっています。LOとHIでのこの領域は驚くほどのスレッシュホールドサウンドを生み出すように調整されており、ゲインは暖かくもっています。ギターを持っているサウンドは損なわれていません。この低めの領域はLOの全てのサウンドでクリップしたコード演奏をするのに優れ、歪みによってまだコンプレッションを受けていないダイナミクス豊かなサウンドとなっています。

GAINコントロールの中域(11時~2時)は、もっともバランスが取れたサウンドが得られるところで、シグナルの中でおおパワフルな効果を持つTONEコントロールと併用して、暖かいフル・サウンドで、アタックがきめ細かく、良いダイナミクスを持ったサウンドを作り出せることが分かるでしょう。CLEANにおいては、素晴らしいコードのレスポンスと豊かさ、そしてまた腰のあるサウンドが得られます。ピックアップの種類や強さにもよりますが、ここはヘッドルームが減少を始める、ゲイン的にクロスオーバーするポイントの近くであるため、クリップしないように注意しなければなりません。LOのベストなサウンドのいくつかはこのゲイン領域で得られますが、理由は音がここから良い感じにこもり始め、美味しいチューブ・オーバードライブのサウンドが得られるからです。HIで12時ぐらいに設定すると、迫力あるコード演奏や単音での演奏にマッチした十分な歪みが得られ、サウンドにコンプレッション感が増えるのが分かります。もしHIでこのあたりの設定にして良い結果が得られないときは、より高出力のピックアップを試してみるのも良いでしょう。

GAINの一番高めの領域(2時~5時)は、完全に歪んだサウンドとなります(特にHIで)。ここからシグナルがローエンドで太くなり、トップエンドが減少して圧縮されたサウンドになります。ダイナミクスもより低いピークでスローになり、よりレガートな、まるやかなフィーリングとなります。CLEANでGAINコントロールをトップエンドに設定すると、ある種の"クリップしたクリーン"サウンドを生み出し、インプット・ステージが歪み始めます。

HIでは、GAINコントロールをトップエンドに設定すると、非常にワイルドなサウンドになり、いずれのゲインチャンネルでもソロ演奏に適した真のポテンシャルを発揮します。ここにはどんなスタイルにもマッチした豊かなゲインが存在しますので、HIチャンネルにおいては、単音での演奏に適したとんでもなくレベルの厚いまるやかなオーバードライブサウンドを生み出します。GAINをマックスにすると、ギターのフィードバック効果で永遠に続くサステインが得られます。

GAINを高めに設定すると、TONEコントロールが効果を段々失っていくのに気付くでしょう。音1つ1つがかなり歪んで、そのキャラクターはそれぞれのチャンネルのボイスと、どのようにそのレベルのゲインに反応するかでほぼ決定されます。もしアドバイスさせて頂ければ、GAINコントロールは可能な限り中域に設定した方が、オーバードライブのベストなバランスを得られますし、TONEコントロールも十分効きます。またアタックも歪みすぎることなく中域にフォーカスされ、GAINが高めに達するまではスローダウンします。

MASTER

このコントロールは各チャンネルの全体の音量を決定します(プリアンプ部の最後に位置します)。GAINコントロールとのコンビネーションでプリアンプの信号強度(チャンネルのパラメーターを含みます)を、演奏する音量に合わせて決定します。使用するチャンネルでコントロールの設定が終わったら、MASTERコントロールで各チャンネルの音量のバランスを取って下さい。

チャンネルごとの演奏ボリュームを調整するのに加えて、エフェクトループが使用されている時(LOOP SENDとRETURNのジャックにプラグが接続されているとき)は、MASTERはEFX SENDコントロールの役割も果たします。

全てのチャンネルにおいての通常そして最適なパフォーマンスを得るには、MASTERコントロールの設定を9時~12時の範囲に設定します。多くのプレイヤーは、平均的な音量を10時~11時あたりに設定しています。

純粋主義者の人は、MASTERをフルにしてGAINを好みの音になるまで上げたりします—考えると確かにこのやり方はもっとも純粋と言えます。理論的には、彼らはこの方法でコントロールを全てシグナルパスから切り離しているわけで、やり方に問題はありませぬ。しかし、MASTERコントロールが付いていない多くのビンテージアンプは、プリアンプからパワーアンプにいく出力を調節または微調整を行うために、回路にある抵抗で行います。

本機のMASTERコントロールは実際可変抵抗以上のものであり、音が損なわれることなく自由に何度でも設定が行えます。もしオールドスクールなアプローチを試すのであれば、是非ともMASTERコントロールをこのように使って下さい(アンプにもダメージを与えません)。しかし、GAINとMASTERの両方をコンビネーションとして設定すれば、ほとんど無限に近い形で素晴らしいサウンドメイクが可能ですので、そのポテンシャルを制限してしまうことにはなりません。

PRESENCE

このコントロールはTREBLEより上の周波数を調節するもので、パワーセクションの中のシグナルパスのさらに下流にあり、プリアンプ最後のトーンコントロールよりもさらに後です。パワーセクション内にあるプレゼンス回路と異なり、TC-50のプリアンプはロール・オフタイプのプレゼンスなので、トーン的な理由によりパワーセクション内の性急さとしてシンプルさのレベルを保持しています。ここは、その性急なキャラクターと能力が中域を非常に強くヒットする部分です。

PRESENCEは、パワーアンプを押さえつけて、コンプレッションを加えサウンドをダークにしたり、燃えさかるような高次倍音を解放することが出来るコントロールとも考えることが出来ます。また、信号のダイナミクスを決定したり、アンサンプルのミックスの中での抜け具合を決定するという大変重要な役目も果たしています。

低めの設定(7時半～10時半)では、コンプレッション感を伴った、暖かく丸いサウンドとなり、ダイナミクスの上下が制限されます。設定を上げると(11時～2時半)、トップエンドが支配的になり、コンプレッション感は"抜け感"に取って代われ、ダイナミクスのピークが性急になります。コントロールをトップエンド(2時半～5時半)に設定すると、高次倍音が支配した超アグレッシブなサウンドとなり、音楽的なバランスが取れないと幾分危険な領域となります。ハイノートが勇敢な耳をつんざくかもしれませんので、例えばスタジオ・レコーディングでヘビーなクランチリズムのパートを演奏したり、もっぱら低音弦の演奏パートでの使用をお勧めします。この領域は、特にP.A.で大量のマイクを立てて同時に使用すると、非常に危険です。

チャンネル1のクリーンサウンドでは、概して少し高め(10時半～12時半)の設定でより効果が得られますが、どのチャンネルでもオーバードライブが加わります。一旦歪み始めると、プレゼンスコントロールで設定された周波数は鋭く、また注意しないと非常に速いものとなります。オーバードライブがかかったコード演奏は、単音の演奏よりも高めの設定(10時半～12時半)に適していますが、単音ならば通常11時以下あたりに設定した方が、丸くフォーカスされたボーカルのようなサウンドとなります。

TREBLE

GAINがTC-50において最もパワフルなコントロールだとすると、TREBLEは2番目となります。TREBLEコントロールは、チャンネル全体のキャラクターのシェイピングを行います。簡単に残りのTONEコントロールを支配するので、3つのチャンネル全てで豊かつバランスの取れたサウンドにするためにはセッティングは非常に重要です。TREBLEの設定はTONEコントロールでハーモニーを形成するのに極めて重要だと理解した上で慎重に行わなければなりません。

TREBLEを中域にした場合は3つの全てのチャンネルでベストなバランスとなり、十分ブライトでありながらそれでいて豊かで暖かいサウンドとなります。最初はTREBLEを12時からスタートして、お好みのトーンが得られるまで少しずつ上げたり下げたりすることをお勧めします。しかし、MESAの持つもう1つの側面から生み出された回路そしてそのDNAによって、TREBLEとPRESENCEの設定を低めに設定するとより暖かみのあるサウンドが得られます。ギターに使用されている木材やピックアップそして演奏技術にもよりますが、それらのコントロールの設定を12時以下にすると実際素晴らしいサウンドが得られますし、必要であればTREBLEやPRESENCEを反時計回りに回し切ってしまうと、MIDの帯域がかなりの領域をカバーした、トップエンドをカットしたサウンドを得ることも出来ます。

チャンネル2と3においては、MIDコントロールはTREBLEにいくらか近い領域をカバーし、そのセンターはMID高めと低めの帯域と連動しています。この特異性を有効に使って、TREBLEを"通常"よりも低めに、反対にMIDを少し高めに設定してみてください。TREBLEを低め、または極端に低くしたり反時計回りに回し切るとMIDを高めにすると、とてもクールなサウンドが得られます。これら2つのパワフルなコントロールの相互作用をチェックして、頭の中で聞こえるサウンドを現実のものにすることが重要になります。

MID

TC-50においてMIDコントロールは、非常にパワフルでありながら、より通常のトーンコントロールとして機能し、GAINやTREBLEコントロールのように広範囲をカバーするパワーはありません。それでも中域(MID)の設定は、3つのチャンネルのサウンドに強い影響を及ぼします。それは中域の広い範囲で作用し、TREBLEのセクションで述べたように、かなりの量の"低-高域"の周波数が伴います。この高域は、TREBLEやPRESENCEのものよりも低い領域ですが、サウンドミックスの中でアンプのサウンドにパンチを与えたり抜けを良くするときに重要です。

CLEANチャンネルでのバックিং、しかしながら実際は広く全てのチャンネルにおいて、MID低めの設定(7時半～10時)は中域のアタックをいくらかカットしボトムエンドをより息づかせます。またこの領域は演奏しやすく、弦を弾く際により弾力を感じることでしょう。シングルコイルのギターであれば、タイトでゴムのようなアタックと弾むような低音のキャラクターが得られ、ブルーズやR&B、カントリーのクリーンサウンドのスタイルにマッチします。

中域の中間位置(10時~1時)は、パンチとアタックが大きくなり、より性急さも加わって、マホガニーギター使用時の抜けを良くしサウンドに輪郭を与えるのに最適です。トップエンドがMIDコントロールの範囲の中で姿を現し始め、コード・サウンドがより押し出され、パンチの効いたキャラクターとなって美しく鳴り始めます。

さらに上げると(1時~5時半)、アグレッシブなサウンドとなり、MIDの領域内で支配的かつ過激なトーンを生み出します。この範囲になると、MIDの設定が高すぎて隠れてしまったトーンの豊かさや暖かみを、BASSコントロールを上げて戻そうと試みるかもしれません。もしMIDのこの領域のアタックや性急さがお好みであれば、他の全てのコントロール(MASTERを除き、サウンドが前に出るように)を高めに設定してMIDのカーブに追従するようにします。これで良いのですが、プリアンプのヘッドルームがこのトーンの激しい競争によって食べ尽くされてしまうので、TONEコントロールの設定から来る高信号によってプリアンプがクリップし始めます。

チャンネル2や3のゲインサウンドも、MIDの設定が上がると同じようになります。低めの設定(7時半~10時半)ではワイドで、跳ねるようなフィーリングのコードサウンドや、よりまるやかでスムーズな単音のトーンが得られます。ゲイン回路によって作られる高次倍音はTREBLEによって大きくコントロールされますが、艶のある立体的なかすみがサウンドにかかり、ピンテージなソウルを持った良いフィーリングになります。

MIDが10時を過ぎるあたりから、豊かなミッドレンジのパンチを伴ってサウンドの抜けが良くなってきます。この領域は、GAINコントロールを中ぐらいに設定するとクラシックなクランチサウンドが得られます。このMIDのキックは過去40年続くロックに不可欠の、アイコン的なミッド・ゲインのインパクトがあってタイトなサウンドを形成するのに重要な部分です。チャンネル3では、単音のサウンドはスピードや暖かみを伴いながら大きく前へ出てきて、美味しいサウンドが特に高いGAIN設定のときに火を噴きます。

1時を過ぎると、中域の周波数で抑えられていた激しさが解き放たれ、トップエンドが大部分を占めてきます。ここでは、TREBLEコントロールよりもより広い範囲で、より前へ出たアグレッシブなアタックが求められる領域です。弦を弾く感触がよりシビアになって、あなたの演奏が時間軸でより顕著にアウトプットされます。この領域は、GAINコントロールの設定に関わらず、チャンネル2のミックスの中でより前へ出た、ロックのバックキングに適しています。チャンネル3での単音のソロサウンドは光のように速く、小節線のオリジナルの位置に忠実に、聴く人の耳に正確に伝わります。

1つお勧めとして、またはより注意事項として・・・MIDコントロールは、慎重に設定しないと耳につらい周波数帯を含んでいます。頭をスピーカーキャビネットに近づけて、オーディエンスやマイクにどのように音が拾われているかチェックしてみてください。MIDを高めに設定すると、それがどれぐらい衝撃があるのか一もしかしたら耳障りなのか一を知って驚くと思います。人々の耳を傷付けたくないのであれば、それは良いアイデアではありません。MIDを中ぐらいか低めに設定しても、十分なアタックがありなおかつサウンドはバランスが取れて暖かみがあるので、他の人々はあなたの演奏1音1音に顔をしかめることなく、楽しむことができます。

DRIVE/TIGHT

このスイッチは中域を再ボイスし、中間から高めの中域をブーストすることによって通常パンチとアタックが加わります。またトップエンドに少しコンプレッションを加えローエンドをタイトにすることで、それらのコンビネーションによって、その名の通りサウンドがタイトになります。チャンネル1では、この効果は若干のオーバードライブ・エフェクトとなります。混乱を招かないよう、この機能はDRIVEと名付けられています。

チャンネル1では、DRIVEはGAINコントロールが高めの設定になっているとき、ブルーズやルーツサウンドに適したブッシュとわずかな歪みを加えます。スレッシュホールドをブッシュするのに必要な少しのゲインが加えられるため、ドライブしたバックキングや激しいソロフレーズに適した、より生き活きとしたクリップサウンドとなります。

チャンネル2のゲインサウンドでは、TIGHTはローエンドをタイトにしてパーカッションのような中域のゲインを加えます。またGAINを低め(12時半以下)にするとブルーズに適したサウンドとなり、1時以上にするとクランチ・バックキングサウンドに適したアグレッシブなアタックとコントロールが効いたローエンドが得られます。チャンネル3のハイ・ゲインサウンドでは、TIGHTのボイスによってローエンドがコントロールされミッドの豊かさが加わって、本当にハイ・ゲインな設定(非常に歪んだ設定)でもフォーカスされたサウンドになります。

どれを使っても、このボイスでサウンドのもう1つの次元を発見し、それぞれ3つのチャンネルで有効なボイスを見つけられるでしょう。

BASS

MIDコントロールと同様に、BASSコントロールも普通のTONEコントロールのように機能し、サウンドに丸みをつける豊かなボトムエンドをブレンドします。異なるチャンネルが選択されると内部のスイッチが作動し、サウンドスタイルに合わせて低域の位置と帯域が変化します。これはそれぞれのサウンドにとって非常に重要で、トーンキャラクターの大部分を占めています。

チャンネル1ではより低めのBASSの帯域をコントロールして深みや立体感、エアー感をサウンドに加えます。チャンネル2と3ではよりBASSの高めの帯域をコントロールしてレゾナンスを作り出し、サウンドをよりタイトかつ軽快にします。この帯域はチャンネル1の低めの帯域と比較すると、よりバランスが取れている—またもしかしたらより便利な一帯域となるので、これらの2つの帯域でそれぞれ異なる設定が出来るということが、チャンネル間でバランスよく、フットスイッチ操作によって素晴らしいサウンドを生み出すのに重要なのです。

チャンネル1では、サウンドに暖かみや迫力をブレンドするのにBASSコントロールでバランスを取ることが出来ますが、ミックスの中でアタックやきらきらした感じは強くはありません。GAINの設定によっても異なりますが、GAINをより低めにすると少し高めのBASS設定が可能になります。ベストなポイントについては色々試してみる必要がありますが、簡単なざっくりとしたガイドラインとしては、GAINを上げたらBASSは下げたほうが良いです。

例；

GAINを12時の位置にする場合 — BASSは1時の位置

GAINを1時の位置にする場合 — BASSは12時の位置

GAINを2時の位置にする場合 — BASSは11時の位置

チャンネル2と3のBASSコントロールの高めの帯域は、チャンネル1の低域の設定よりもより高い設定が可能です。BASSの設定を12時から3時ぐらいにするのが一般的です—BASSを高めに設定するときはGAINを低めに、GAINを高めに設定するときはBASSの設定に注意することが必要です。GAINを下げる(9時半～12時)と、サウンドがよりタイトになり、BASSコントロールによって豊かなローエンドのエアー感を作り出せます。GAINによって音が歪み始めると(12時～5時半)、音が分厚くなって低音が薄まり迫力が出て—ある一定のポイントまで—低音の帯域は落ち着き始め、スタイルによっては妨げになることもあります。

OUTPUT

TRIPLE CROWNには全体にかかるOUTPUT(アウトプット)コントロールが搭載されていて、一旦プリアンプの設定を終え、個々のチャンネルのMASTERコントロールでバランスを整えた後、この1つのつまみノブの上げ下げで全体の演奏ボリュームを調整することが出来ます。OUTPUTはパワーセクションのDRIVERステージの前に位置していますので、エフェクトリターンとしても動作します。

毎回の演奏時、STANBYスイッチを動かす前はOUTPUTコントロールの設定はゼロにしておき、徐々に上げていけば不意の大きい音量に驚くことを防げますし、特にライブやスタジオで信号が突然急激に上がってスピーカーやエンジニア、またはオーディエンスに被害が及ぶようなことがありません。

ある伝統主義者的人達は、効果的に回路からチャンネルのMASTERコントロールを"取り除いて"、チャンネルのMASTERをフルの状態にしてOUTPUTコントロールをMASTERとして使うことを好みます。また別の人達は、反対のアプローチ(OUTPUTをフルにしてチャンネルのMASTERをOUTPUTとして使用する)がより良いレスポンスを生むと感じています。どちらの方法も正しく、それぞれ若干異なるレスポンスを生むのですが、そのどちらもチャンネルのダイナミクスや歪みのレベルによっては、エフェクトループで均一な信号レベルを得るのが難しくなります。

我々は、チャンネルのMASTERとOUTPUTの両方をそれぞれ中域ぐらいで使用するのが、エフェクトループの均一な信号レベルと同様、良いレスポンスとチャンネル間でバランスの取れた、最も使いやすい演奏ボリュームが得られることを発見しています。

SOLO

SOLO(ソロ)は、プリセット可能な音量ブーストの機能で、付属のフットスイッチのSOLOボタンまたはMIDIプログラムナンバーでONに保存されることによって動作させることができます。基本的に直列で配線された追加のOUTPUTコントロールですので、OUTPUTで設定されたレベルより上の音量を得ることが出来ます。

このフットスイッチ操作またはMIDIプログラム可能な機能は、スイッチをクリックするだけで曲のある部分をショーケース的に瞬時に際立たせたり、同じプリアンプのサウンドが異なる音量レベルに必要な時にそれを得られるもので、フットスイッチ操作も可能で非常に便利です。

注意: MESAのフットスイッチでチャンネルや機能をコントロールする際は、リアパネルのSOLOスイッチをOFFの位置に設定して下さい。そうすることによって付属のMESAフットスイッチによるSOLOの操作が可能になります。

MIDIプログラムでプログラムする際は以下の手順で簡単に行えます：

1. MIDIコントローラーで、SOLOをONに設定したいMIDIプログラムナンバーを選択します。
2. リアパネルのSOLOのミニトグルスイッチ(BIASスイッチの近くの同じ段です)をOFFにし、それから1回ONにするとSOLO機能がトリガーされます。
3. STOREキーを押します。

SOLO機能は、STOREキーを押す前に選ばれていたチャンネル、リバーブそしてエフェクトループの設定に沿った、(保存されたばかりの)プログラムナンバーで動作します。

注意: SOLO機能がON(スイッチがONの位置)で専用フットスイッチが接続されていないとき、SOLOとOUTPUTの両方の設定は信号に影響しますが、OUTPUTの設定次第となります。例えば、OUTPUTがゼロまたはフルのとき、SOLOの設定は信号に影響を及ぼしません。OUTPUTが調整可能な設定のときは、SOLOはその音量をコントロールすることが出来ます。

POWER

本機に電源を供給するためのトグルスイッチです。電源のアースがとれていることを確認して下さい。またコンセントにも適正な電圧が供給されていることを確認して下さい。アンプを使用していない状態から演奏を開始するときは、STANDBYスイッチの項で述べている手順に従って下さい。真空管に与える問題を減らし、また真空管の寿命を延ばすことが出来ます。

STANDBY

演奏をしていない状態からアンプを使用する際に、このトグルスイッチをSTANDBYの位置にして真空管(特にパワー管)の暖気を行います。まずPOWERスイッチをONにする前に、STANDBYスイッチがSTANDBYの位置にあることを確かめます。POWERスイッチをONにしてから最低30秒間そのまま待ち、それからSTANDBYスイッチを"ON"の位置にします。この手順によって、高電圧が冷えた真空管を直撃することによるダメージを防ぎ、また真空管の寿命を延ばすことが出来ます。

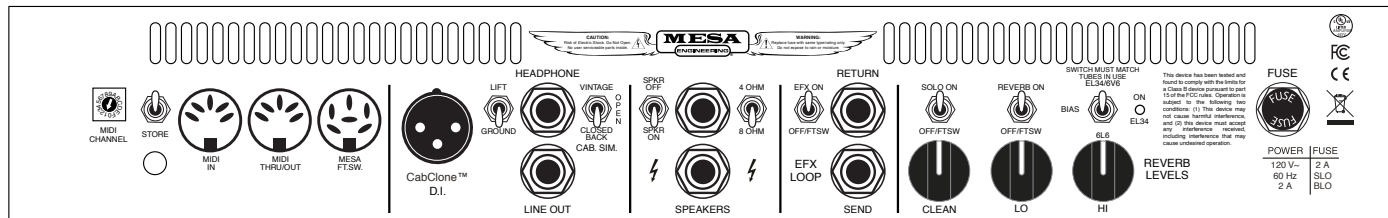
コールドスタート時(演奏していない状態)からの手順：

(アンプの電源を3分以上OFFにするときは、常にこの手順を踏んで下さい)

1. STANDBYスイッチを"STANDBY"の位置にしておきます。
2. POWERスイッチを"ON"に切り替えます。
3. 30秒ほど(またはそれ以上)待って、真空管の暖気を行います。
4. STANDBYスイッチを"ON"に切り替えます。

注意: このコールドスタートからの手順は真空管の寿命と信頼性を確保するのに重要な部分です。電球のように、最も消耗するのが電源が入った瞬間(ほんの少しの、最初の数秒)です。また電球のようにもし調光器が付いていて最初の数秒のボルテージを下げられるのであれば、さらに寿命を延ばすことが出来るでしょう。STANDBYスイッチはアンプの調光器のようなもので、上記のような使い方をすれば真空管(特にパワー管)の寿命を長くし、ベストなパフォーマンスを得ることが出来ます。

リアパネル(コントロールと機能)



電源コネクター(リアパネル下側)

付属の電源コードを接続するコネクターです。適正な電圧が供給されているコンセントから、付属の電源コードを使ってここからアンプに電源を供給します。なお、付属の電源コード以外のご使用は絶対におやめ下さい(アンプや接続機器にダメージを与えることがあります。またその際の保証は行いません)。

FUSE

外的要因による電源の過大入力またはパワー管に問題がある場合にヒューズが切れることがあります。必ずヒューズホルダーの近くに明記されているものと同じ規格のSLO-BLOタイプのフューズに交換して下さい。

パワー管のショートは大抵ヒューズが切れたことが原因で発生します。アンプの裏側に回って、このマニュアルのSTANDBYスイッチの項に書いてあるコールドスタート時からの手順に従って下さい。それからSTANDBYスイッチをON側にして、パワー管をチェックします。もしパワー管が良くない状態でONにすると、パワー管がアーク放電して(点滅している)のが分かります。その時はすぐにSTANDBYスイッチをSTANDBY側にして、パワー管を交換します(必要があればヒューズも交換して下さい)。

STANDBYスイッチをON側にしても特に異常が見つからなかったときは、パワー管が一時的にショートしてヒューズが切れた可能性があります。時によって、パワー管内での接続が一時的にショートすることがあり、しばらくはまた通常のように動作するのですが、不良と考えられますのでできるだけ早く交換して確実なパフォーマンスが得られる状態にしておいたほうが良いでしょう。また、もしあまり使っていない真空管がアーク放電していたりショートしていたら、明らかに不良である真空管を交換して、もう1つはそのままにします。

もし長い間真空管を交換していない場合は、何か問題が起こればそれは全てのパワー管を交換する時期です。

交換用の真空管は、少なくとも1ペアほどいつでも交換できるところに保管しておきましょう。

REVERB

瑞々しいオールチューブのリバーブは、TC-50の3つのチャンネルを美しい立体的な光で包みます。3つのチャンネルで、それぞれのREVERB(リバーブ)のミックスレベルをコントロールすることが出来ます。回路がアクティブ(ON)であれば、付属のフットスイッチまたはMIDIメッセージからもコントロール出来ます。

リバーブは3つの設定が可能で、常に"ON"か、付属のフットスイッチでマニュアルで動作させるか、またはMIDIプログラムで自動的に動作させるかになります。

REVERBスイッチがONの位置にあるときは、回路が動作し、REVERBコントロールによって各チャンネルのドライ/ウェットのブレンド量を決定します。OFF/FTSWの位置にあるときは、付属のフットスイッチのREVERBボタンまたは前もって書き込まれたMIDIプログラムによってONになるまで、リバーブ回路はOFFになります。

REVERBの状態をMIDIプログラムナンバーにプログラムする際は、以下のシンプルなプロセスにて素早く簡単に行えます。

1. ご使用のMIDIコントローラーで、任意のMIDIプログラムナンバーを選択します。
2. フロントパネル上のチャンネル選択スイッチで、MIDIプログラムのプログラムナンバーに保存したいチャンネルと機能を選択し、リアパネルのMIDIコントロールスイッチを一旦OFFにしてから一回ONにします。
3. リアパネルのSTOREキーを押します。

これで、ご使用のMIDIコントローラーで現在表示されているMIDIプログラムナンバーにチャンネルとREVERBの状態が保存され、次にそのプログラムナンバーを選択した際に再び呼び出されます。

注意: MIDIコマンドでREVERBをコントロールする際は、このマニュアルのMIDIの項をお読み下さい。

SOLOスイッチ

SOLO(ソロ)は、プリセット可能な音量ブーストの機能で、付属のフットスイッチのSOLOボタンまたはMIDIプログラムナンバーでONの状態で作成されることによって動作させることが出来ます。基本的に直列で配線された追加のOUTPUTコントロールですので、OUTPUTで設定されたレベルより上の音量を得ることが出来ます。

このフットスイッチ操作またはMIDIプログラム可能な機能は、スイッチをクリックするだけで曲のある部分をショーケース的に瞬時に際立たせたり、同じブリアンプのサウンドが異なる音量レベルが必要な時にそれを得られるもので、フットスイッチ操作も可能で非常に便利です。

注意: MESAのフットスイッチでチャンネルや機能をコントロールする際は、リアパネルのSOLOスイッチをOFFの位置に設定して下さい。そうすることによって付属のMESAフットスイッチによるSOLOの操作が可能になります。

MIDIプログラムでプログラムする際は以下の手順で簡単に行えます：

1. MIDIコントローラーで、SOLOをONに設定したいMIDIプログラムナンバーを選択します。
2. リアパネルのSOLOのミニトグルスイッチ(BIASスイッチの近くの同じ段です)をOFFにし、それから1回ONにするとSOLO機能がトリガーされます。
3. STOREキーを押します。

SOLO機能は、STOREキーを押す前に選ばれていたチャンネル、リバーブそしてエフェクトループの設定に沿った、(保存されたばかりの)プログラムナンバーで動作します。

注意: SOLO機能がON(スイッチがONの位置)で専用フットスイッチが接続されていないとき、SOLOとOUTPUTの両方の設定は信号に影響しますが、OUTPUTの設定次第となります。例えば、OUTPUTがゼロまたはフルのとき、SOLOの設定は信号に影響を及ぼしません。OUTPUTが調整可能な設定にあるときは、SOLOはその音量を上げることが出来ます。

EFX LOOP (SERIES)

これら2つの1/4"ジャックはエフェクター/プロセッサを接続するポイントとなります。エフェクトループは基本的にブリアンプの最後からドライバーステージへのブリッジの回路となり、SENDジャックがブリアンプの最後の信号を拾い、RETURNジャックを通じてドライバーチューブの前のパワーセクションに送られます。

この接続ポイントを使用することによって、最良の外部プロセッサの信号のノイズ比と音響上のパフォーマンスが得られます。つまり、ここはTRIPLE CROWNのサーキットバスでは重要な意味を持つ分岐点であり、ここにいかなるものが挿入されてもアンプ全体のパフォーマンスに影響を及ぼすことです。

エフェクトループはドライ信号とシリーズ(直列)に配線されていますが、つまり全体の信号はここを通過するというものであり、そこがループから影響を及ぼさない純粋な信号が取り出される、パラレルループとは違うところです。そのため、ループ内で使用する機器の品質とパフォーマンスが、アンプからベストなサウンドとパフォーマンスを得るのに大変重要なのです。我々は、パフォーマンスの面でTRIPLE CROWNと良いマッチングが得られるか判断するために、機材を購入する前にチェックしてみることをお勧めします。1つのヒントが価格です。市場価格で分割すると、大抵の場合は支払う価格に応じて、広い範囲で商品の品質と音響性能が得られるでしょう。テクノロジーの競争は恐ろしいペースで行われ、機能は常に最先端のものが目指されますが、アンプに求めるサウンドやフィーリングはあなたが決めるものであり、エフェクトプロセッサ機器を選ぶ際、そして・・・結局のところ、ピュアなアナログのチューブアンプの真ん中に何を挿入するかということを、同様に判断することをお勧めします。

TRIPLE CROWNをMIDIで操作するとき、エフェクトループの状態はTRIPLE CROWNのプロセッサ内にある工場出荷時の設定か、MIDIプログラムナンバーの位置で最後に保存された設定によって決定されます(楽器店で前に試奏された設定が残っている可能性もあります)。

注意: 外部プロセッサをエフェクトループに接続する際は、常に出来るだけ短めの、高品質(低キャパシタンス)のケーブルを使用して下さい。そうすることにより、キャパシタンス(静電容量)による音質の劣化を最小限にし、またより最適な使用条件を得ることが出来ます。

MIDIプログラム使用時に、あるチャンネルでエフェクトループの状態を保存するには、他の機能の保存時と同様、最初にTRIPLE CROWNのスイッチング・バスにてロケーションをリセットしなければなりません。

MIDIプログラム使用時に、任意のチャンネルにエフェクトループの状態を保存するには以下の手順に従って下さい:

1. 使用するMIDIコントローラーにて、任意のMIDIプログラムナンバーを選択します。
2. フロントパネルのインプットジャックの近くにある、チャンネル選択ミニトグルスイッチで任意のTRIPLE CROWNのチャンネルを呼び出します。
3. リアパネルにあるEFXミニトグルスイッチを"OFF/FTSW"に切り替えます。
4. EFXミニトグルスイッチを"EFX ON"(スイッチ上側)に切り替えます。
5. TRIPLE CROWNのリアパネルのMIDIセクションにあるSTOREスイッチを一度だけ切り替えます。これで現在のチャンネルとエフェクトループの設定が、表示されているMIDIプログラムナンバーにて本機プロセッサ内で書き込まれました。

これで、ご使用のMIDIコントローラーで現在表示されているMIDIプログラムナンバーにチャンネルとエフェクトループの状態が保存され、次にそのプログラムナンバーを選択した際に再び呼び出されます。もし呼び出されない場合は、上記のステップの1~5を再度繰り返してみてください。

SPEAKERS

TRIPLE CROWNは、他のMESAアンプと若干異なる方法でスピーカーのインターフェースを行っています。2つの1/4"ジャックは4~16Ωまでの最も一般的なスピーカー抵抗値に対応しています。2Ω抵抗については対応しておらず、またお勧め出来ませんが、それは2Ω抵抗がギター用スピーカーの世界では非常に稀であり実用的でないからです。ミニトグルスイッチは、4Ωと8Ωのどちらかにアウトプットトランスのタップを切り替えますが、そのどちらも最も一般的なスピーカーの抵抗値となります。

TRIPLE CROWNコンボを単独で使用する、またはTRIPLE CROWNヘッドを標準のMESA 8Ω 4x12または1x12のスピーカーキャビネットと接続して使用するときは、インピーダンススイッチを8Ωに設定します。またほとんどのMESA 2x12キャビネットも8Ωに配線されているので、同様にこの8Ω設定で使用出来ます。

2台目の8Ωスピーカーまたはキャビネットをもう1つのスピーカーアウトに接続する際は、インピーダンススイッチを4Ωに設定することをお勧めします。このように使用することでより良いインピーダンスのマッチングとなり、フル・パワーとヘッドルームが確保されます。

4Ωキャビネットを単独で使用する場合はインピーダンススイッチを4Ω設定にします。16Ωの4x12キャビネットまたは2x12キャビネットを使用する場合は8Ωに設定します。若干最大出力が下がりますが、4つまたは2つのスピーカーがカバーするため気付くほどではありません。2台の16Ωキャビネットを8Ω設定で使用すると、より良いインピーダンスのマッチングとなり、フル・パワーとヘッドルームが確保されます。

注意: 2台の4Ωキャビネットの使用はお勧めしません。理由は、そのような使用に対応した設計がされていない本機のアウトプットトランスに2Ωの過度な負荷がかかってしまうからです。

唯一安全な(しかしお勧めしません)方法として、CAB CLONE D.I.を使用するときにはスピーカーアウトに抵抗を接続せずにアンプを駆動し、CAB CLONEのSPKR ON/OFFスイッチをOFFにしてダイレクトレコーディングを行うというやり方があります。そのようなときでも、我々は常にスピーカーアウトにスピーカーを接続しておくことを強くお勧めします・・・誰か(テックやレコーディング・エンジニア等)がアンプのリアパネルにあるSPKR ON/OFFスイッチを切り替えてしまわないとも限りませんので。

以下は、いくつかの一般的かつ正しいスピーカーアウトとの接続例です；

- ・ 1台の8Ωキャビネット — 8Ωのスピーカーアウトに接続します(1台のMESA 8Ωキャビネットを使用)。
- ・ 2台の8Ωキャビネット — それぞれ4Ωのスピーカーアウトに接続するか、または1台のキャビネットをMESAキャビネットの平行インプットに接続し、2台目をMESAキャビネットの他の平行ジャックに接続します。
- ・ 1台の4Ωキャビネット — 4Ωのスピーカーアウトに接続します(4Ωキャビネットのいずれかを使用)。
- ・ 2台の4Ωキャビネット — 接続はお勧めしません！本機のアウトプットトランスは2Ω抵抗を接続するにはセットされていません。
- ・ 1台の16Ωキャビネット — 8Ωのスピーカーアウトに接続します(最大出力が若干下がります)。
- ・ 2台の16Ωキャビネット — 平行ボックスまたは"Y"コネクタを使用して、8Ωのスピーカーアウトに接続します。

これらの一般的なスピーカーの接続方法は、プレイヤーが行うであろう幅広いセッティングのほとんどをカバーすると思います。またここに挙げていない他の一般的ではない方法もあり、その内のいくつかは安全かつユニークなサウンドのものもあると思います。接続方法に迷った際は詳しい技術者に確認して、決して自分の判断で接続しないことをお勧めします。

SPKR ON/SPKR OFFスイッチ

この小さいトグルスイッチは、CAB CLONEを使って(アンプからの出音無しに)"静かに"レコーディングを行う際に、スピーカーアウトをミュートすることが出来ます。ライブスピーカーもCAB CLONEのXLRダイレクトアウトも両方使いたい場合はSPKR ON、またはD.I.アウトのみを使いたい場合はSPKR OFFを選択して下さい。また、このスイッチをミュートスイッチとして使うことも出来ます(リアパネルにあるのと、フロントパネルにはそのためのSTANDBYスイッチもあるので使う頻度は少ないと思われます)。

注意: 重要です！SPKR OFFのスイッチ位置にある際は、自動的に負荷抵抗器がスピーカーアウトと接続され、アウトプットチューブやトランスへのダメージを防ぎ、またXLR D.I.アウトにて(スピーカーが接続されていない)サイレントレコーディングを行うことが出来ます。SPKR ONを選択すると、内部負荷が無効になり信号がスピーカーアウトに接続されます。スピーカーを接続していない状態で、SPKR ONにスイッチを切り替えるのは絶対におやめ下さい！アンプにダメージを与える恐れがあり、またその場合は保証対象外となりますので十分ご注意ください！

注意: 覚えておいて頂きたいこととして、もしアンプの電源スイッチやSTANDBYスイッチ、GAINやMASTERコントロール(エフェクトループ内のエフェクターのインプット/アウトプットボリュームも同様です)がONになっているのに音が出ない場合は、リアパネルのSPEAKERセクションのSPKR ON/SPKR OFFスイッチをチェックして、トグルスイッチがSPKR ON側になっているかを確認して下さい。運搬中やセッティング中にスイッチに何かがぶつかって、スイッチが切り替わってしまっているかもしれません。

HEADPHONE

本機には、スピーカーを使用しない/できない場合にアンプのサウンドを個人で楽しむためのヘッドホンアウトが装備されています。このステレオ1/4"ジャックからは、本機に搭載されたCAB CLONE™によってスピーカーをシミュレートした信号が供給されますが、それはTRIPLE CROWNのサウンドやフィーリングを、お使いのヘッドホンに驚くほど表現豊かに伝えることが出来るのです。

CAB CLONEの回路は、アンプのサウンドをこのように素晴らしく伝え表現することが出来るのですが、その理由としては、CAB CLONEの信号がスピーカーアウトからの信号をキャプチャーしているからです。つまり、アウトプット・トランスや真空管も含めたアンプの全て(トーン、ニュアンス、自然な真空管のコンプレッションや通常スピーカーから聴こえる弾むようなフィーリングまで)がこのジャックから引き出されるということです。

確かにスピーカーキャビネットはアンプを生で演奏したときに聴こえるたくさんの要素を音として形成しますが、CAB CLONEの回路はスピーカーを通して生で演奏した経験の多くを得て素晴らしい仕事をやってのけており、スピーカーのマイキングにかかる時間や手間を省いています。1本のケーブルをただ接続するだけです。というわけで、この素晴らしいサウンドを個人練習のためにいつでもヘッドホンアウトから得られるという本当のボーナスをあなたにお届けします。

ヘッドホンアウトの音量は各チャンネルのMASTERコントロールによって決定されます(回路がパッシブでオペアンプ等は使用されていない)ので、ここで調節が必要になります。

注意:ヘッドホンはサウンドも効果(音量)も様々で、ヘッドホンアウトのパフォーマンスは使用されるヘッドホンによって決定されます。本機に使用するヘッドホンについては、いくつか違うタイプのものやブランドを試すことをお勧めします。

注意:ヘッドホンと耳との距離は、あなたのお好みのスピーカーからの距離とは明らかに異なりますので、アンプのセッティングはお使いのヘッドホンの固有の品質にベストマッチする形で調整する必要があります。

注意:内部のREVERB(リバーブ)を少しミックスの中に入れるもしくはエフェクトループの外部プロセッサでディレイのプリセットを使用すると、スピーカーを設置する場所のエア感や広がりを補うので、ヘッドホンアウトのサウンドがより生き活きと自然になります。

本機は、CAB CLONE™ D.I.回路と、それに関連したヘッドホンアウトを搭載した4つ目のMESAアンプです(最後には多分なりません)。この包括的なダイレクトレコーディングかつプライベートなモニタリング機能は、アンプの価値や柔軟性そして利便性を非常に高め、本機の素晴らしいサウンドとフィーリングを深夜に(いつでも)演奏して楽しめるのと同様に、素早くそして手間の要らない、ダイレクトレコーディングの機能としても新しいオプションも備えています。

注意:ヘッドホンジャックにケーブルを接続すると、CAB CLONE D.I.のXLRバランスアウトが無効になります。ヘッドホンが回路的に許容量一杯になりサウンドが損なわれるので、ヘッドホンアウトとD.I.アウトは同時には使用できません。

注意:パッシブ回路であるCAB CLONE™にはヘッドホンアウトのボリュームコントロールが無いため、該当のチャンネルのMASTERコントロールでヘッドホンアウトの音量を決定する必要があります。

注意:SPKR ON/OFFスイッチがSPKR ONの位置にあるときは、スピーカーアウトにスピーカーが接続されていることを必ず確認して下さい。接続されていない状態で使用するとアンプにダメージを与える恐れがあり、またその場合は保証対象外となりますので十分ご注意下さい。スピーカーや外部抵抗(レジスター等)が無い状態でアンプをSPKR ONを選択して使用すると、アウトプットトランスにダメージを与えたり、アンプが正常に動作しなくなる恐れがあります。また、その場合は保証対象外となりますので十分ご注意下さい。

LINE OUT

この1/4"アウトプットジャックは、アンプのスピーカーアウトからの未処理のコピー信号をコンソールやその他機器に送る際に使用します。リアパネルにラベリングされているように、この信号は公称+4dBのアウトプットレベルの信号に配線されます。とはいっても、フロントパネルのMASTERボリュームの設定やパワーセクションがどれぐらいの出力で鳴らされるかにも依ります。

注意:このLINE OUTジャックには標準のモノラル1/4"フォンジャックであり、ステレオジャック(または時々TRSバランスジャックに見えます)ではありません。LINE OUTジャックとコンソールを接続する際は、モノ・フォンプラグを使用して下さい。もしステレオのTRSプラグしか持っていない場合は、CAB CLONEのLINE OUTジャックに接続して信号を得る必要があります。

CABCLONE™ D.I.

このマニュアルの最初の概要の部分で述べたように、本機には1つ(唯一ではないかもしれませんが)、MESAのリアパネル史上最もクールな機能が搭載されています。それが、搭載型CAB CLONE D.I.そしてキャビネットシミュレーター機能です。この搭載型のダイレクトレコーディング機能は、本機の素晴らしいサウンドとフィーリングを捕えて、スピーカーのマイキングを行うことなくダイレクトにコンソールやコンバーター、またはレコーダーへ送ることが出来るというものです。実際、多くの著名なプロデューサーやエンジニア、またプレイヤー達がこの機能を賞賛しています。

既に高い評価を受けている単体のCAB CLONE™ D.I.からの機能はそのまま、スピーカー補正が行われたD.I.XLRバランスアウト(とヘッドホンアウト)は、スピーカーアウトからの信号を捉えて、ダイレクトに信号に変換するという素晴らしい仕事を行います。リアパネルにある5つの各部分は、ライブスピーカーを同時に使うか使わないかも選択できるので、必要であればダイレクト信号とマイキングされたサウンドをブレンドすることも可能です。

CAB CLONEのセクションは、以下の各部分で成り立っています：

- ・ SPKR ON/SPKR OFFスイッチ — スピーカーのステータス(スピーカーを同時に使うかどうか)を選択します
- ・ CLOSED BACK/OPEN BACK/VINTAGEスイッチ — キャビネットのスタイルを3種類から選択します
- ・ CabClone™ D.I.アウト — XLRバランスD.I.アウトの端子です
- ・ LIFT/GROUNDスイッチ — LIFT側にするとバランスアウトの端子のPin 1がフローティング状態になります

このコントロール群の配列は、おそらく最も効果的でのMESAアンプにも搭載されるべき機能で成り立っており、機能的に、そして演奏時の楽しみとしての両方の可能性を広げるものです。TRIPLE CROWNは、我々のアンプの中で4番目にこのパワフルなツールを装備したものとなりましたが、信頼性やトーンを犠牲にすることなく、ライブユースまたはレコーディングにおいてスピーディーかつ便利に使用できるものとなっています。それは間違いなくこのモデルのプロユースなポテンシャルを高め、コンパクトなパッケージに入ったこのモデルをMESAの新しい時代の先駆けのアンプとして、そのハイパワーなパフォーマンスとスタジオですぐに使える利便性を兼ね備えたものとなっています。

CLOSED BACK/OPEN BACK/VINTAGEスイッチ

本機に搭載されているCabClone™ D.I.は、3つのクラシックな"キャビネットをシミュレートした"ボイシングモードと、単体のCabClone™ D.I.からOUTPUTコントロールを除いた全ての機能を装備しています。シミュレーションはパッシブ形式(ゲインを加えるためのオペアンプは使用されていない)のアナログ技術によるものですが、MESAが45年に渡って世界中のスピーカーのトップブランドと共同開発してきたカスタムスピーカーや、またそれを載せるスピーカーキャビネットをデザインしてきた蓄積から作り出されたものです。

これらCAB CLONE™の"バーチャル・キャビネット"は、異なるスピーカーやゲインの範囲、また異なる楽器やピックアップに対応したダイレクト回路のEQのレスポンスに対応することが出来ます。その選択肢の音のレンジですが、1つはトップエンドが強調されてブライトでオープンなクリーンサウンド(OPEN BACK)、そしてよりコンプレッション感のあるサウンドで高次倍音が抑えられ、温かみがあり、歌うような単音のサウンドまたは厚いハイゲインのリズムサウンド(VINTAGE)、そしてミッドがカットされ、トップとボトムが強調されたレスポンスカーブのCLOSED BACKはヘビー・クランチリズムやハイゲインのソロ演奏に優れています。

クリーンサウンドとオーバードライブサウンドは、これらの異なるキャビネットのタイプをそのサウンドに必要とするので、CAB CLONE™でダイレクトレコーディングをする際は3つのボイシングが演奏するサウンドにマッチするか試してみる必要があります。

VINTAGEモードは、高域のハーモニクスを抑え、コンプレッションが掛かったウォームで丸いサウンドを再現しています。これは、クリーンなジャズサウンドや、ブルースやロックのソロ、特にフュージョンやロック、メタルなどのハイゲインなソロに最適です。このモードではアンプ側のコントロールがより自由になるので、トレブルやプレゼンスを幅広く調整し、高音域を強調したりカットしたりすることが可能です。

真ん中のOPEN(BACK)は、トップエンドが取り出され、高次倍音が多くよりオープンな、立体的で輝くようなサウンドが特徴です。このスイッチ位置は、クリーンサウンドやブライトでアタックの速いオーバードライブの掛かったリズムサウンドに最適です。

CLOSED BACKモードは、MESAのRectifier Traditionalキャビネットに敬意を表し、12"のプリティッシュスタイルの60Wスピーカーを4発搭載したクローズドバックのスピーカーキャビネットのレスポンスをシミュレートしています。中域がカットされ、トップエンドは、ここが大部分なのですが、勢いのある巨大でワイドなサウンドです。大きく調整された低域やスムーズなビテンテージにインスパイアされたリードサウンドがオーバードライブまたはクランチのバックギングが必要であれば、このモードが良いでしょう。またCLOSED BACKモードはハイゲインサウンドにも最適で、特にライブスピーカーとCabClone™をコンビで使用するとき効果を発揮します。マイキングされたスピーカーによってトップエンドが強調され、またCLOSED BACKモードによってレスポンスが太く調整され、サウンドのバランスが良くなります。

ライブスピーカーのマイキングサウンドとCab Clone™のダイレクト信号をミックスするときはキャビネットのボイシングもそれぞれ試し、ミキシングの際に反対または異なるレスポンスを持ったキャビネットのサウンドも混ぜると良いかもしれません。

この3つのキャビネットのボイスングを使用すれば、CAB CLONEのレスポンスはほとんどのサウンドのスタイルに合わせて調整することが出来ます。ライブスピーカーを同時に使用するときは、使用するスピーカーが選択したボイスングのサウンドに影響を及ぼすかもしれません。使用するスピーカーやキャビネットの本来のキャラクターによりますが、より敏感にダイナミックになったり、またはサウンドがよりブライต์になることがあります。

注意: CAB CLONEの回路は、スピーカーアウトから使用されるどんなスピーカー(抵抗)にも給電を行うので、(ダイナミクスと周波数レスポンスの両面で)アンプのパワー部に影響を受けます。

CABCLONE™ D.I. (XLR OUTPUT)

このオス型の3ピンXLRアウトプットは、バランス信号をダイレクトにコンソールやプリアンプ、レコーダーに供給します。(必要な長さの)標準3ピンXLRマイクケーブルを使用してお使いの機器に接続して下さい。次の選択としては、Cab Clone™のスピーカー補正された信号のみでレコーディングを行うか、または左側にあるSPKR ON/SPKR OFFミニトグルスイッチを切り替えてライブスピーカーのサウンドをミックスするかどうかです。

Cab Clone™の回路はパッシブで、特定のアウトプットレベルコントロールが存在しないため、各チャンネルのMASTERコントロールやOUTPUTまたはSOLOの設定が、Cab Clone™のアウトプットのSENDレベルの強度(音量)を決定します。

注意: 本機でダイレクトレコーディングを行う際は、始める前にまずSTANDBYスイッチが"0"の位置(スイッチ下側)にあるか、そして各チャンネルのMASTERコントロールが"0"の位置にあるかどうかを毎回必ずチェックして下さい。こうすることで、コンソールやプレイバックモニターのフェーダー(INPUTアッテネーター)が既に上がっていたり上がりすぎている場合の急激な音量のアップ等を防ぐことが出来ます。

また、同様の急な音量アップを避けるためには、コンソールやプリアンプ/レコーダーのINPUTトリム(コントロール)もゼロにしておいたほうが良いでしょう。

LIFT/GROUNDスイッチ

このスイッチでCab Clone™のバランスD.I.アウトのXLR端子(Pin 1)のグラウンド(アース)を回路またグラウンドシャーシから切り離すと、大抵の場合(全てではありません)グラウンド・ループによって発生するハムノイズを除去することが出来ます。サイレントレコーディング環境では、どんな小さいノイズも目立ってしまいますが、グラウンド・ループは最もよくある(そして厄介な)ハムノイズやバズの原因です。この問題をいつでも解決できる万能薬ではありませんが、それでもノイズフロアには有効であり、少なくともハムノイズの主な原因を排除出来ます。

MESA FTSW

6ピンのDINジャックで、MESA TRIPLE CROWN専用のフットスイッチケーブル、または他の標準6ピンDINジャックのケーブルを接続します。TRIPLE CROWNのフットスイッチは、3つのチャンネルそしてリバーブに瞬時にアクセスすることが出来ます。ステージやスタジオでMIDIでコントロールしないプレイヤーや、アンプのサウンドや機能を手軽に楽しみたい場合に大変便利です。

注意: MESA FT.SWジャックを使用しているときは、MIDI機器をMIDIインプットジャックに絶対に接続しないで下さい!!

TRIPLE CROWNのフットスイッチを使用するために; 6ピンのDINケーブルをリアパネルのMESA FTSWジャック(リアパネルに向かって1番右側のDINジャック)に接続しますが、ピンがコネクタにしっかり差さっているか確認して下さい。また無理やりケーブルをジャックに差さないで下さい! ピンが真っすぐになっていれば、簡単かつしっかりとコネクタに接続出来ます。

それから、6ピンDINケーブルの反対側を、TRIPLE CROWNフットスイッチのジャックに接続します。STORE LEDが短く光り、またフットスイッチが接続されるとフットスイッチのLEDも光ります。もし光らない場合は、ケーブルを一旦抜いて、ピンが真っすぐに差し込まれるように再度接続してみてください。またアンプ側もケーブルがしっかり接続されているか確認して下さい。

TRIPLE CROWNのフットスイッチを使用すると、チャンネル、リバーブ、エフェクトループそしてSOLOの切り替えが可能になります。

注意: TRIPLE CROWNフットスイッチとMIDIコントローラーは同時には使用出来ません。どちらか一方を選択してアンプのコントロールを行い、使用しない方のコントローラー用のジャックには何も接続しないで下さい。

MIDI THRU/OUT

この5ピンの標準MIDIジャックは、TRIPLE CROWNのMIDIコントロール部分のTHRU(スルー)/OUT(アウト)ジャックです。お分かりのように、標準の5ピンDINケーブルであれば接続が可能です(ケーブルのピン周りのプラスチックカバーの厚さにより、差し込んだ時の感触が違ふことがあります)。

プレイヤーのセッティングによったり、TRIPLE CROWNがサウンドシステム内でコントローラーからMIDIコマンドを最初に受け取るか、またはMIDIコマンドをシステムの最後の方で受け取るかどうかによりますが、信号情報はマスターユニットから、またシグナルチェーンの次のスレーブから流れます。どちらにしてもTRIPLE CROWNは、適切なMIDI情報をこのジャックを通じてTHRUまたはOUT信号として送信します。

MIDI IN

この5ピンのメス型DINジャックに標準の5ピンMIDIケーブルを接続すると、MIDIコマンドがTRIPLE CROWNのプロセッサーに入力され内部処理されます。MIDIフットコントローラー/シーケンサー/ソフトウェアまたはDAWのいずれかからTRIPLE CROWNに送信される全てのMIDIメッセージがここで受信され、プロセッサーにて適切に処理されます。またTRIPLE CROWNはMIDIプログラムチェンジ、コントロールチェンジまたはSysExメッセージに対応していますが、全てのMIDIメッセージまたはコマンドはTHRU/OUTジャックを経由します。

注意: MIDI INジャックを使用しているときは、MESA FTSWジャックにフットスイッチは接続しないで下さい!!

MIDI CHANNEL

この小さなポットで、16の標準MIDIチャンネルから特定のチャンネルを選択します。MIDIチャンネルポットを設定することにより、コントローラーで送信設定しているのと同じMIDIチャンネルで受信が出来ます。もし使用する機器が、アンプのチャンネルと機能を呼び出すMIDIコマンドのみを使用するギターに特化した機材であれば、多くの場合プレイヤーはチャンネル1または16のみを使い続けます。そのほうが覚えておきやすく、また将来的にシステムが複雑になっても十分な余裕を残しておけます。もしより拡張したMIDIセットアップで使用する場合は、他の楽器やシーケンサーとしてPCをコントロールするときのデータの流れから独立させるために、設定が高めの特定のMIDIチャンネルナンバーが必要になることもあります。TRIPLE CROWNのMIDIチャンネルポットの位置は、MIDIチャンネルと以下の表のように関連付けられます;ポットのクリック位置(0から時計回りに回します)= MIDIチャンネル

MIDIチャンネル選択

MIDIチャンネルポットの位置	選択されるMIDIチャンネル	MIDIチャンネルポットの位置	選択されるMIDIチャンネル
0	1	8	9
1	2	9	10
2	3	A	11
3	4	B	12
4	5	C	13
5	6	D	14
6	7	E	15
7	8	F	16

これで本機についての細かい説明が終わりました。あとは、あなたがこのパワフルなツールをあなたの音楽の中で使用し、未知のサウンドを切り開いていく番です。我々はあなたが経験したことがないようなサウンドを体験し、またそれを新しくエキサイティングなものとして表現されることを願って止みません。このマニュアルのコントロールや機能について学べば、きっとトーンについての言語(知識)を流暢に確かなものにし、また自由に自信を持って欲しいサウンドを探し求めることが出来るでしょう。

ここにいる我々MESA/Boogieのスタッフ全員より、"MESAファミリーによくこそ、そしてあなたが何年にも渡ってこの新しい製品からインスピレーションや演奏する楽しみを享受されることを心から望みます"。



MIDI 使用マニュアル

機能

- ・ インテリジェント・フットスイッチコントロール
- ・ MIDIフットコントローラーの使用が可能
- ・ 最大256プリセットをメモリーに保存可能
- ・ 素早く簡単にユーザープリセットのダンプ(書き出し)/ロード(呼び出し)が可能
- ・ アンプのトグルスイッチでプログラミングが可能
- ・ ロータリースイッチ(ポット)で瞬時にMIDIチャンネル選択が可能
- ・ MIDIプログラムチェンジとコントロールチェンジ・メッセージに対応
- ・ MIDIソフトウェアのアップデートとバージョン識別が可能

電源の入れ方

アンプの電源がONになっているとき、デフォルトのチャンネル(LO)が選択されており、他の機能はSTORE LEDと同様にOFFになっています。少しするとチャンネルと他の機能がトグルスイッチのセッティングに準じて選択され、STORE LEDが短く点灯します。

MESA FTSWジャック

注意: MESA FTSWジャックを使用する際は、MIDI INジャックにいかなるMIDI機器も接続しないで下さい!

MESA FT.SWジャック: 6ピンのメス型DINジャックで、オス型のDINケーブルでフットスイッチを接続します。

TRIPLE CROWNフットスイッチが先に接続されている場合は、アンプのSTORE LEDとフットスイッチ上のLED全てが短く点灯します。

TRIPLE CROWNフットスイッチ上のボタンが押されているときは、STORE LEDが素早く点滅し、押されているボタンを示します。

複数のTRIPLE CROWNをコントロールするには: 複数のTRIPLE CROWNアンプを1台のTRIPLE CROWNフットスイッチで操作するには、単純にTRIPLE CROWNフットスイッチをMESA FTSWジャックに接続し、そのアンプのMIDI THRU/OUTジャックと2台目のTRIPLE CROWNアンプのMIDI INジャックを接続します。3台アンプを使用する場合は、2台目のアンプのMIDI THRU/OUTジャックと3台目のMIDI INジャックを接続します。4台目以降も同様です。

複数のアンプを上記のように操作する場合、TRIPLE CROWNフットスイッチが接続されているアンプのみMIDIチャンネル1を選択し、その他のアンプのMIDIチャンネルは、1以外のMIDIチャンネルを選択します。さらに、フロントパネルのトグルスイッチは、アンプから次のアンプへ同じ設定にしておきます。

MIDI INPUT ジャック

注意: MIDI INジャックを使用する際は、MESA FTSWジャックにTRIPLE CROWNフットスイッチを接続しないで下さい!

MIDI INPUTジャック: 標準の5ピンMIDI DINジャックです。MIDIコントローラーまたは他の機器のMIDIアウトを接続し、MIDIコマンドをアンプに送信します。MIDIフットコントローラーや他の機器へのファンタム電源は供給されません。

MIDI THRU/OUT ジャック

MIDI THRU/OUTジャック: 標準の5ピンMIDI DINジャックです。MIDI INジャックで受信したMIDIコマンドは、このジャックに供給され、またそのまま他のMIDI機器に送信出来ます。また、ユーザープリセットのダンプに送る際はMIDIアウトとして機能します。

MIDIチャンネル

リアパネルのMIDIチャンネルロータリーDIPスイッチで、MIDIメッセージを受信する際のアンプのMIDIチャンネルを選択します。

MIDIチャンネルを変更すると、STORE LEDが短く点灯し、変更が行われたことを示します。

MIDIチャンネルの選択

ロータリーDIP スイッチのポジション	選択される MIDIチャンネル	ロータリーDIP スイッチのポジション	選択される MIDIチャンネル
0	1	8	9
1	2	9	10
2	3	A	11
3	4	B	12
4	5	C	13
5	6	D	14
6	7	E	15
7	8	F	16

ユーザープリセット

本機は、MIDIフットコントローラーからのMIDIメッセージを受信できます。異なるプリセット、または異なるMIDIプログラムチェンジナンバーのパッチを保存し、MIDIフットコントローラーから正しいMIDIプログラムチェンジナンバーを送れば、自動的に保存されたプリセットを呼び出すことが出来ます。またいずれのプリセットでも、ONまたはOFFになっているチャンネルや機能にアサインすることが出来ます。本機は、2つのバンク内にある1~128までのMIDIプログラムチェンジナンバーを使用することによって、最大256のプリセットを保存することが出来ます。

- ・ バンク 1 は電源がONになったときの初期設定で、MIDIプログラムチェンジナンバーはこのバンクでプリセットを呼び出します。
- ・ バンク 2 はMIDIバンク選択メッセージを通じてアクセス可能で、MIDIコントロールチェンジナンバーはCC#0です。
- ・ MIDIフットコントローラーからコントロール値を0(ゼロ)にしてMIDIコントロールチェンジナンバーCC#0をアンプに送ると、バンク 1 が選択されます。
- ・ MIDIフットコントローラーからコントロール値を1またはそれ以上にしてMIDIコントロールチェンジナンバーCC#0をアンプに送ると、バンク 2が選択されます。
- ・ アンプのバンク選択を半永久的(後続のMIDIプログラムチェンジナンバーを受ける状態)にすると、選択したバンクのプリセットが呼び出されます。例；バンク 2 を選択した後は、後続のMIDIプログラムチェンジナンバーはバンク 2 でプリセット(129~256)を呼び出します。バンク 1 を選択した後は、後続のMIDIプログラムチェンジナンバーはバンク 1 でプリセット(1~128)を呼び出します。

MIDIプログラムチェンジナンバーに対応したプリセットを保存するには：

- ・ MIDIフットコントローラーでMIDIプログラムチェンジナンバーを選択します。
- ・ プリセットでONまたはOFFにするTRIPLE CROWNのチャンネルや機能を、アンプのトグルスイッチで手動で選択します。
- ・ STOREスイッチをONにすると、STORE LEDが短く点灯し、プリセットが保存されたことを示します。

プリ・ストア "リセット" が必要です：これまでよく見られるモーメンタリーのプッシュボタンスイッチの代わりに、Mesa/Boogie伝統の頑丈なトグルスイッチでアンプのチャンネルや機能のON/OFFを行い続けるには、同時にMIDIでアンプをコントロールするための洗練されたソフトウェア/アルゴリズムが必要となります。操作方法がミックスされているので、効果を得る前に(保存される前に)、トグルスイッチは二重で動作する必要があります。例；アンプのチャンネル選択トグルスイッチでCLEANが選択され、一方MIDIプリセットやコマンドの設定でLOがアクティブ(ON)になっている場合、プレイヤーがチャンネルをCLEANに変更したい時は、アンプのチャンネル選択トグルスイッチはLOの位置に一旦設定する必要があり、それからCLEANの位置に戻します。STOREトグルスイッチがMIDIプログラムナンバーにコミットする(書き込む)前に、全ての機能も同様にリセットされなければなりません。

MIDIバンク選択メッセージまたはMIDIプログラムチェンジナンバーが、MIDIチャンネルポットで選択した同じMIDIチャンネルで受け取られるときは常に、STORE LEDが素早く点滅し、有効なMIDIメッセージが受信されたことを示します。

プリセットは以下の条件では保存出来ません；

- ・ TRIPLE CROWNフットスイッチがMESA FT.SWジャックに接続されている。
- ・ 電源投入時またはアンプがMIDIプログラムチェンジナンバーをまだ受信していない。
- ・ ユーザープリセット・ダンプが受信されており、それが成功しているかどうかに関わらず、アンプがMIDIプログラムチェンジナンバーをまだ受信していない。

ユーザープリセット ダンプ(書き出し)&ロード(呼び出し) ユーザープリセット・ダンプは、MIDI SysEx(System Exclusive)ファイルのアンプの256のプリセットと共にMIDI THRU/OUTジャックから送信されます。このユーザープリセットダンプ・ファイルは、エラーチェックのためのCRC(Cyclic Redundancy Check=誤り検出符号の一種)バイトも含まれます。

アンプからプリセットをダンプし、他の機器で呼び出すには、MIDI INジャックと、プリセットがコピーされるアンプのMIDI THRU/OUTジャックを接続します。

ユーザープリセット・ダンプファイルは、バックアップとして、またはプリセットを他のアンプで呼び出すために、PCに保存することも可能です。またPCに加えて、MIDI/USBインターフェースと、MIDI SysExファイルの送受信が可能なMIDI アプリケーション/ユーティリティーが必要となります(フリーのものはいくつかありますが、Macユーザーにはwww.snoize.comにてSysEx Librarianを、Windowsユーザーにはwww.Midiox.comにてMidi-Oxを入手されることをお勧めします)。

ユーザープリセット・ダンプは、以下の後、実行されます；

- ・ アンプの電源をONにし、MIDIメッセージを受信する前
- ・ アンプがユーザープリセット・ダンプを受信する(成功したかどうかは関係なく)

注意:ユーザープリセット・ダンプ中は、MIDI INジャックとMESA FT.SWジャックには何も接続しないで下さい。

- ・ ユーザープリセット・ダンプを行うには、アンプのMIDI THRU/OUTジャックと別のアンプのMIDI INジャック、またはMIDI/USBインターフェースを接続します。
- ・ STOREスイッチを押すと、STORE LEDが短く点灯し、MIDI THRU/OUTジャックからユーザープリセット・ダンプが送信されます。
- ・ アンプからのユーザープリセット・ダンプファイルの送信が終わると、STORE LEDが再び短く点灯します — それはほんの数秒です。

ユーザープリセットのロード (呼び出し) はいつでも行えます！

ユーザープリセットのロードが行われている際は、MIDI THRU/OUTジャックとMESA FT.SWジャックには何も接続しないで下さい。

- ・ ユーザープリセットのロードを行うには、アンプのMIDI INジャックと別のアンプのMIDI THRU/OUTジャック、またはMIDI/USBインターフェースを接続します。
- ・ ユーザープリセット・ダンプファイルが送信され、MIDI INジャックでアンプがファイルを受信を開始するとすぐにSTORE LEDが短く点灯します。
- ・ アンプからのユーザープリセット・ダンプファイルの受信が終わると、STORE LEDが再び短く点灯します — それはほんの数秒です。

ユーザープリセット・ダンプファイルを受信する際は、最初にTRIPLE CROWNのRAMメモリーに保存され、不揮発性EEPROMメモリーの中の既存のプリセットには上書きしません。既存のプリセットは、ユーザープリセット・ダンプファイル全体が完全に問題なく受信された場合のみ、上書きされます！

ユーザープリセットのロードに失敗すると、STORE LEDは再びユーザープリセット・ダンプファイルの受信を開始するまで点灯したままとなります。または、他の作業が行われるとSTORE LEDはONまたはOFFになります。ロードが失敗するのはまずファイルが壊れているのが理由で、アンプ内蔵のCRCエラー探知機が、既存のプリセットに壊れたファイルが上書きされるのを防ぎます。

MIDIコントロールチェンジナンバー

MIDIプログラムチェンジナンバーをサポートするため、アンプはMIDIコントロールチェンジナンバーにも対応します(メッセージ・・・MIDI連続コントローラーまたはCCメッセージとしても知られています)。

CCメッセージを送信するMIDIフットコントローラーを使用する際は、フットコントローラーのボタンでダイレクト・コントロールまたはアンプの独立機能にインスタント・アクセスすることが出来ます。そのようにして、MIDIフットコントローラーは専用のTRIPLE CROWNフットスイッチとして機能します。

大抵のプレイヤーはMIDIコントロールチェンジナンバーまたはMIDIプログラムチェンジナンバーのどちらかを使用してアンプをコントロールします(両方使用することも可能です)。MIDIプログラムチェンジナンバーを使用するとアンプのメモリーにプリセットを保存できますが、MIDIフットコントローラーからTRIPLE CROWNのチャンネルや各機能(FX LOOP/SOLO/REVERB)にインスタント・アクセスすることは出来ません。MIDIコントロールチェンジナンバーを使用すると、MIDIフットコントローラーのメモリーにプリセットのコンビネーションが保存出来ますので、アンプのチャンネルやON/OFF機能にインスタント・アクセスすることが出来ます。

MIDIコントロールチェンジナンバーが、アンプのMIDIチャンネルポット(DIPスイッチ)で選択されたのと同じMIDIチャンネルで受信されるときは常に、STORE LEDが素早く点灯して有効なMIDIメッセージが受信されたことを示します。

注意: もし予期しないMIDIの動作がある場合は、TRIPLE CROWNがMIDIコントロールチェンジとプログラムチェンジナンバーの両方を同時に受け取っていることがまず考えられますので注意して下さい。

TRIPLE CROWN™ MIDIコントロールチェンジナンバーのアサイン

アンプの機能	MIDI CC ナンバー	コントロール バリュー	コメント
CL	20	64 - 127 (ON)	LOとHIが自動的にOFFになる
LO	21	64 - 127 (ON)	CLとHIが自動的にOFFになる
HI	22	64 - 127 (ON)	CLとLOが自動的にOFFになる
FXLP	23	0 - 63 (OFF) 64 - 127 (ON)	
RVRB	24	0 - 63 (OFF) 64 - 127 (ON)	
SOLO	25	0 - 63 (OFF) 64 - 127 (ON)	
注意: (1)CC#20-#22は、それぞれが唯一のものとして、最も優先して受信されます。			

ソフトウェアのアップデート

ソフトウェアのアップデートは、アンプがSTANDBY状態にあり、MIDI THRU/OUTやMESA FT.SWジャックに何も接続されていないときに実行出来ます。

ソフトウェアのアップデートを行うには、ファームウェア・アップデートファイル(インターネットで取得可能)、PC、MIDI/USBインターフェース、そしてMIDI SysExファイルの送受信が可能なMIDIアプリ/ユーティリティが必要となります(Macユーザーにはwww.snoize.comにてSysEx Librarian、Windowsユーザーにはwww.Midiox.comにてMidi-Oxというフリーのものを入手されることをお勧めします)。

重要!!! MIDIアプリ/ユーティリティのセッティングは、以下の要領でソフトウェアのアップデートを行います:

Mac - SysEx Librarian

Menu > Preferences

Transmit Speed = 50% max.

Windows - Midi-OX

Main Menu > View > SysEx

SysEx Window Menu > SysEx > Configure

Low Level Output Buffers, Size = 256 & Num = 64

Output Timing & Delay Between Buffers = 192ms min.

Auto-Adjust Buffer Delays If Necessary = Off/Unchecked

他の機材と同様ですが、ソフトウェアのアップデートを行う前にプリセットのバックアップを取っておくことをお勧めします!

ソフトウェアのアップデートを行うには、まずアンプの電源をONにし、STOREスイッチもONにしてチャンネルスイッチをCLEANに設定します。STORE LEDがONとなり、ソフトウェアがアップデートモードにあることを示します。

ファームウェア・アップデートファイルを送信する前にアンプのチャンネルを変更すると、ソフトウェアのアップデートが中断され、STORE LEDがOFFになります。また、アンプも通常の動作に戻ります。

ファームウェア・アップデートファイルを受信する際は、STORE LEDが絶え間なく点滅し、アップデートが終わるまで点滅し続けます。

ソフトウェアのアップデートが完了するのに約30秒かかります。

ソフトウェアのアップデートが完了すると、STORE LEDの点滅が終わり、アンプが通常の動作に戻ります。

ソフトウェアのアップデートに失敗すると、STORE LEDは再びファームウェア・アップデートファイルの受信を開始するまで点灯したままとなります。アップデートが失敗するのは、ファイルが壊れているか、ファイル送信が処理スピードより速いことが原因です。MIDIアプリ/ユーティリティの設定が上記のようにされていれば、ファームウェア・アップデートファイルが処理が間に合わない状態で送信されるといった、速度に関する問題を防ぐことが出来ます。

ソフトウェアが速度の問題で正しく送信されなかった場合は、STORE LEDは新たなファームウェアファイルが送信されるまで点滅せず、単にアンプの電源をOFFにして、再び電源をONにしてからSTOREスイッチもONにし、チャンネルスイッチもCLEANに設定します(前回同様です)。

SysEx Librarianアプリ/ユーティリティには、ファイルのチェックサムを計算する2つの異なる方法があります。これらの内の1つまたは2つをチェックして、ファイルが壊れていないかチェックして下さい。

残念ながらMidi-OXにはチェックサムの機能がありませんが、Microsoftから "Microsoft File Checksum Integrity Verifier" と呼ばれるフリーのユーティリティを取得出来ます。

ソフトウェアバージョン SysEx メッセージ

短いMidi SysExメッセージが各ユーザープリセット・ダンブに付いていますが、それは単にアンブのMIDIインターフェース・ソフトウェアのバージョンのIDを示しています。

このメッセージを見るには、PC、MIDI/USBインターフェース、そして複数のMIDI SysExメッセージの送受信が可能なMIDIアプリ/ユーティリティが必要となります(Macユーザーにはwww.snoize.comにてSysEx Librarian、Windowsユーザーにはwww.Midiox.comにてMidi-Oxというフリーのものを入手されることをお勧めします)。

ソフトウェア・バージョンナンバー = x.y

TRIPLE CROWN ソフトウェア バージョン SysEx メッセージ = F0 00 01 4B 04 68 x y F7

TRIPLE CROWN™ ファクトリー プリセット

ユーザーメモリー/プリセットナンバー	CL	LO	HI	FXLP	RVRB	SOLO
1, 16, 31, 46, 61, 76, 91, 106, 121, 136, 151, 166, 181, 196, 211, 226, 241, 256	○					
2, 17, 32, 47, 62, 77, 92, 107, 122, 137, 152, 167, 182, 197, 212, 227, 242	○			○		
3, 18, 33, 48, 63, 78, 93, 108, 123, 138, 153, 168, 183, 198, 213, 228, 243	○				○	
4, 19, 34, 49, 64, 79, 94, 109, 124, 139, 154, 169, 184, 199, 214, 229, 244	○					○
5, 20, 35, 50, 65, 80, 95, 110, 125, 140, 155, 170, 185, 200, 215, 230, 245	○				○	○
6, 21, 36, 51, 66, 81, 96, 111, 126, 141, 156, 171, 186, 201, 216, 231, 246		○				
7, 22, 37, 52, 67, 82, 97, 112, 127, 142, 157, 172, 187, 202, 217, 232, 247		○		○		
8, 23, 38, 53, 68, 83, 98, 113, 128, 143, 158, 173, 188, 203, 218, 233, 248		○			○	
9, 24, 39, 54, 69, 84, 99, 114, 129, 144, 159, 174, 189, 204, 219, 234, 249		○				○
10, 25, 40, 55, 70, 85, 100, 115, 130, 145, 160, 175, 190, 205, 220, 235, 250		○			○	○
11, 26, 41, 56, 71, 86, 101, 116, 131, 146, 161, 176, 191, 206, 221, 236, 251			○			
12, 27, 42, 57, 72, 87, 102, 117, 132, 147, 162, 177, 192, 207, 222, 237, 252			○	○		
13, 28, 43, 58, 73, 88, 103, 118, 133, 148, 163, 178, 193, 208, 223, 238, 253			○		○	
14, 29, 44, 59, 74, 89, 104, 119, 134, 149, 164, 179, 194, 209, 224, 239, 254			○			○
15, 30, 45, 60, 75, 90, 105, 120, 135, 150, 165, 180, 195, 210, 225, 240, 255			○		○	○

FACTORY SAMPLE SETTINGS

BIG THREE

ON POWER STANDBY
 SOLO ○
 EFX ○
 SOLO OUTPUT
 ON REV ○
 triple Crown

HI PRES BASS TIGHT MASTER MID GAIN TREBLE ○
 NORM

LO PRES BASS TIGHT MASTER MID GAIN TREBLE ○
 NORM

CLEAN PRES BASS DRIVE MASTER MID GAIN TREBLE ○
 NORM

HI CLEAN INPUT
 TC-50[®]

CLASSIC

ON POWER STANDBY
 SOLO ○
 EFX ○
 SOLO OUTPUT
 ON REV ○
 triple Crown

HI PRES BASS TIGHT MASTER MID GAIN TREBLE ○
 NORM

LO PRES BASS TIGHT MASTER MID GAIN TREBLE ○
 NORM

CLEAN PRES BASS DRIVE MASTER MID GAIN TREBLE ○
 NORM

HI CLEAN INPUT
 TC-50[®]

CLEAN & DROP

ON POWER STANDBY
 SOLO ○
 EFX ○
 SOLO OUTPUT
 ON REV ○
 triple Crown

HI PRES BASS TIGHT MASTER MID GAIN TREBLE ○
 NORM

LO PRES BASS TIGHT MASTER MID GAIN TREBLE ○
 NORM

CLEAN PRES BASS DRIVE MASTER MID GAIN TREBLE ○
 NORM

HI CLEAN INPUT
 TC-50[®]

GAINED UP

ON POWER STANDBY
 SOLO ○
 EFX ○
 SOLO OUTPUT
 ON REV ○
 triple Crown

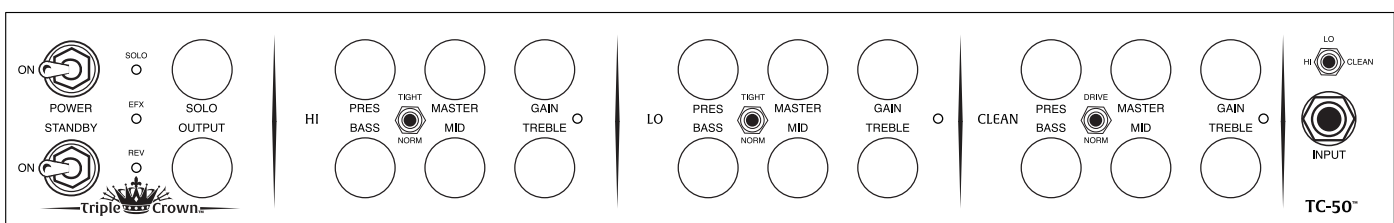
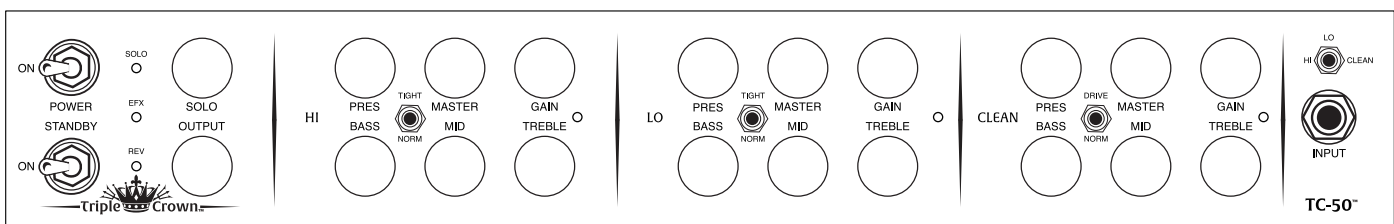
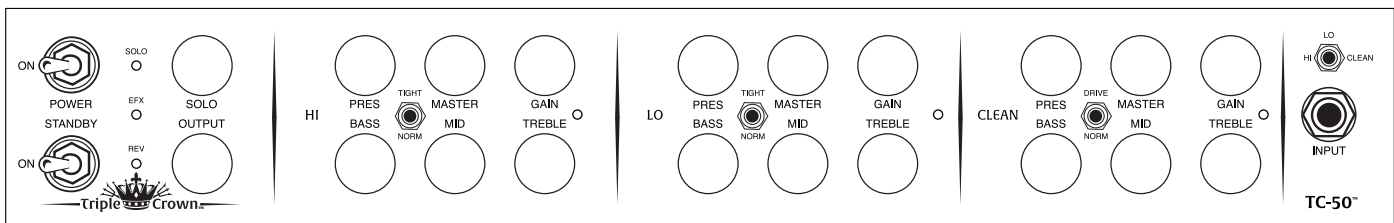
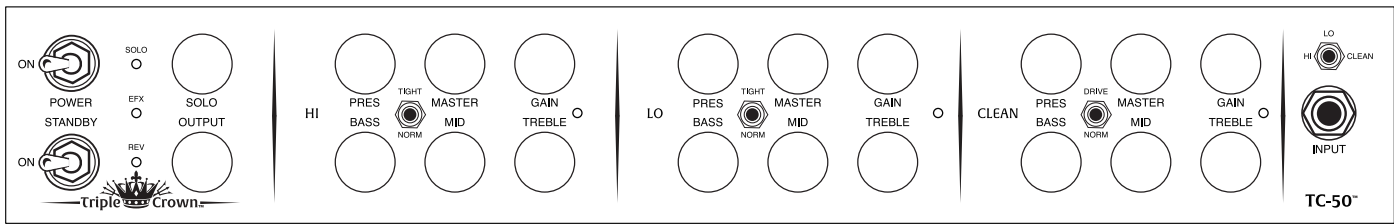
HI PRES BASS TIGHT MASTER MID GAIN TREBLE ○
 NORM

LO PRES BASS TIGHT MASTER MID GAIN TREBLE ○
 NORM

CLEAN PRES BASS DRIVE MASTER MID GAIN TREBLE ○
 NORM

HI CLEAN INPUT
 TC-50[®]

USER SETTINGS



真空管のノイズについて：

状況によって、真空管のノイズを経験したことがあるでしょう。危険性があるというわけではなく、トーンに影響するものです。真空管の交換は電球を変えるようなもので必ずしも技術者に依頼しなければならないというものではなく、実際にやってみるとそう難しいことではありません。(ですが、やはり慣れていない方には楽器店に相談の上、技術者による交換を依頼することをお勧めします)。

真空管を交換する際に最初に我々がお勧めしたいのは、アンプを安定した台の上に乗せて頂くことです(そうすれば腰を曲げることなくアンプ内部の真空管を確認出来ます)。また、真空管を交換する際に照明が当たってチューブソケットがはっきり見えます。アンプを使用した後で真空管に触る際は、大変高温になっていますので十分に注意して下さい！ まだ熱を感じる場合は、布きれ等を使って真空管を持つようにします。また真空管のシルバーの先端の下のガラス部分はあまり熱を帯びていないのでそこを持った方が交換しやすいはずです。また真空管をソケットに固定する際も、外す際と同様に優しく持ちます。

パワー管の問題を診断する：

パワー管の問題は主に二つあります：ショートか、ノイズです。たいていそのどちらかの問題に陥るのですが、診断と処理は通常シンプルです。

フューズが飛ぶときは、軽度か重度かに関わらずたいていがパワー管の故障が原因です。軽度の場合は、電子流が制御格子を超えて、過電流が流れるというものです。音が歪んだり少しハムノイズが聞こえてきたりする場合は、アンプをSTANDBYにしてすぐパワー管をチェックします(赤くなっているかを確認します)。ショートしてる管がバイアスを下げるためたいていペアの二つが熱くまた発光していますが、一つだけが熱く発光している場合は、それだけが原因です。数分間赤くなってなければ、他の二つは問題ないでしょう。

この場合は物理的に真空管の内部でショートは起こらず(電子流が暴れているだけです)、しばらくSTANDBYにしてそれからONに戻せば、一時的には問題はなくなっているはずですが、それからまた真空管をチェックして、再び同じ問題が起こるようなら、問題のある真空管がオーバーヒートを起こすので特定することが出来ます。

重度の故障の場合はあまり問題は簡単ではなく、最悪の場合は真空管の内部でショートが起こり、スピーカーから大音量のノイズが発生します。その場合はただちにアンプをSTANDBYの状態にして下さい(おそらくそれまでの間にフューズが飛びます)。またそのようなショートの場合は、真空管内部の部品同士が接触し、故障の状態になります。パワー管の交換と、SLO-BLOタイプのフューズの交換を行い、このマニュアルに書いてある方法で再びアンプの電源を入れます。

真空管のノイズ：

ノイズはしばしば真空管内の汚れが原因だったりしますが、真空管のガラスを指で軽く叩いてみると、ノイズの質が変化して音が聞こえたりします。しかしながら、12AX7を指で軽く叩いたときにスピーカーから何らかのノイズが聞こえるのは通常の状態です。INPUTジャックに近い管の音は大きく聞こえるもので、何故なら二つ目の12AX7管がアウトプットを増幅しているからです。

パワー管は通常指で叩いても常に静かなはずですが、叩いた時にパチパチやシーツと音を立てるときは、おそらく問題があります。パワー管のノイズを確認するには、アンプをSTANDBY状態にして、問題のあると思われるパワー管をソケットから抜いて、また戻してみます。ハムノイズが聞こえるようなときは、プッシュ・プルの真空管マッチングバランスが崩れています。問題があると思われる真空管を突き止めるときはいつも、POWERスイッチやSTANDBYスイッチを常に片手で触れながら、トラブルが発生したときにすぐにOFF出来るようにしておきます。

もし問題がどこにあるか分からないときは、疑わしいものだけを新品の真空管に交換する方法をお勧めします。チューブ交換の方法については、前述の説明を参考して下さい。同じチェックをするだけなら、技術者にアンプを送って真空管交換を依頼するよりもご自分でするほうが手間ではないかも知れません(それでもやはり自身での交換に不安がある場合は、最寄りの楽器店にご相談下さい)。

プリアンプの真空管の問題を診断する：

チューブ仕様のアンプを使用したことがあれば、プリアンプの真空管ノイズを経験したことがあるかも知れません。しかし、これがすぐに故障に繋がるというわけではありませんので、安心して下さい。この不安を解消する一番の近道は、真空管を交換することです。

最初に、なるべくアンプのパフォーマンスを落とさないためにも、少なくともいくつかの予備のプリ管を準備しておくのが良いでしょう。ちょっとしたプリ管の問題というのは、主に二つのカテゴリーに分けられます：ノイズと、マイクロフォニックノイズです。ノイズの種類は、パチパチ音であったり、ホワイトノイズ、ヒスノイズ、ハムノイズ等があります。マイクロフォニックノイズとは、ゲインや音量を大きくしたときに、金属的かつ周波数の高いサウンドでハウリングを起こすものです。マイクロフォニックノイズは、楽器側の音量を絞ったり、楽器をアンプから離すことでハウリングが止まるかどうかで、問題を分けることが出来ます。

(ハウリングがピックアップのフィードバックによるものであれば、これでハウリングが止まるからです)。また機器の振動やショックによっても引き起こされます("マイクロフォンを叩く"というのが、マイクロフォニックノイズの語源になっています)。

1つのモードやチャンネルのみでプリ管の問題が起こるのであれば、その問題を解決する最善の方法は真空管の交換です。反対に、特定のモードやチャンネルにトラブルの原因が絞れない場合は、全てのモードやチャンネルに関わっている、プリ管に問題があるのかも知れません。あるいは、可能性は低いですが、ドライバー真空管に問題があるかも知れませんので、特定のモードやチャンネルに特定できない場合は、ドライバー管を交換する方法もあります。ドライバー管の問題は、一般的にパチパチ音やハムノイズがアンプの出力から聞こえる、または全てのモードでアンプの出力が弱くなるという症状となって現れます。

たまたま弱ったドライバー管がアンプのサウンドをフラットかつ生気のないものにすることがありますが、ごくまれであるため、同様の問題が生じた場合はやはりパワー管の劣化が原因と考えられます。

トラブルの原因が特定できない場合に、一番早くて確実な方法は、プリ管を同時に交換することです(その後どこに問題があるか分かったときのために、外した真空管を保管しておいて下さい)。INPUTジャックに近い真空管のサウンドがノイズっぽく感じられるかも知れませんが、それはその真空管が一番最初に信号が通る真空管であり、その後で出力が他の真空管により増幅されていくからです。その理由から、"インプット・ソケット"(通常V1と表示されています)に装着する真空管は最もノイズが少ない物を選びます。

プリアンプの後段 - パワー管の直前 - の真空管にノイズがなければ、ほとんど問題は発生しません。このアンプには最も適正な真空管が装着されていますので、真空管を交換する場合は全部一度に外すのではなく、一つ一つ外して取り付けるようにして下さい。また問題の無かった真空管に戻す時は、必ず元々装着してあったソケットに戻すようにして下さい。また真空管を交換するときは、アンプの電源をSTANDBYにしてから行って下さい(そうすることで、スピーカーから大きなノイズが出ることを防げます。そうしないとたとえゆっくり真空管を取り外したとしてもノイズが発生します)。

もしアンプを運搬する必要がある場合は、アンプ本体(シャーシ)を新聞紙等で包んでください。また包んだアンプ本体と段ボール箱に間に、15センチ程の隙間("クラッシュ・スペース")を空けて下さい。エアークッション("プチプチ")等で包むのも良いですが、発泡スチロールはなるべく使用しないで下さい

(運搬中に発泡スチロールが擦れて、その粉がアンプ内部に入り込み、電子部品に損傷を与える可能性があります)。

プリアンプ管は一般的には劣化することはありませんので、気分的な交換はあまり良いアイデアとは言えません。もし交換しても結果が変わらない場合は、元に戻してください。まれなことではありますが、もしトラブルシューティングの手順の中で損傷していることが分かった場合は、適切に交換を行って下さい。

注意：プリ管を指で軽く叩いた時に金属っぽい音がするのは異常ではありません。真空管からパチパチ音等が出力されない限りは、通常通りに使用することができます。

スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド:

インピーダンス:

スピーカー接続において最も基本的で重要なのは、位相を正相にする事です。これにより素晴らしい音を出力する事が可能になります。これはそんなに難しい事ではありません。負荷についていくつかの事と、最適な負荷でスピーカーを接続する事を理解すれば良いのです。

MESA/Boogie アンプは、4 オームと 8 オームを扱う事が出来ます。真空管アンプは、4 オーム未満でドライブする事はしないで下さい。;これを行うと、出力トランスを損傷する可能性があります。2 オームを扱う事の出来る数少ないアンプ (例えば MESA (メサ) の Bass 400+) であれば大丈夫です。反対に高い抵抗値 (例えば 16 オーム等) の場合はアンプを傷める事はありません。

ミス・マッチング:

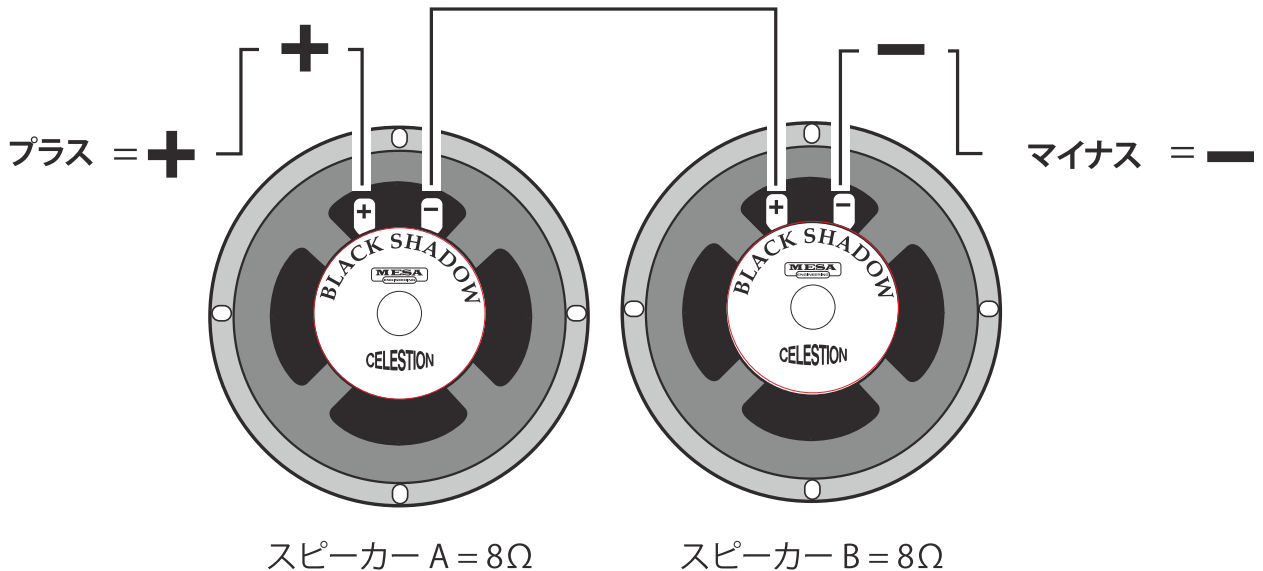
高い抵抗値 (例えば 8 オーム出力を 16 オームのキャビネットに接続) でドライブすると、少しフィーリングが異なり、レスポンスが際立った感じになります。少しのミス・マッチであれば、トーンが若干暗く、出力とアタックが少し弱く、レスポンスが少し速くなる程度です。スピーカー・キャビネットが複数になると、ミスマッチは選択肢の 1 つになるほどです。

キャビネット・インピーダンスの算出方法:

お持ちのスピーカーが 1 台の場合は、そのスピーカーのインピーダンスとアンプのインピーダンスを合わせて下さい。複数のスピーカーをお持ちの場合は、アンプにかかる負荷を計算しなければなりません。複数のスピーカーの接続方法は次の 3 種類になります。:

シリーズ (直列):

スピーカーを直列に接続した場合、それぞれのスピーカーのインピーダンスを単純に加算します。例えば、8 オームのスピーカーを 2 台直列に接続した場合は、16 オームになります。

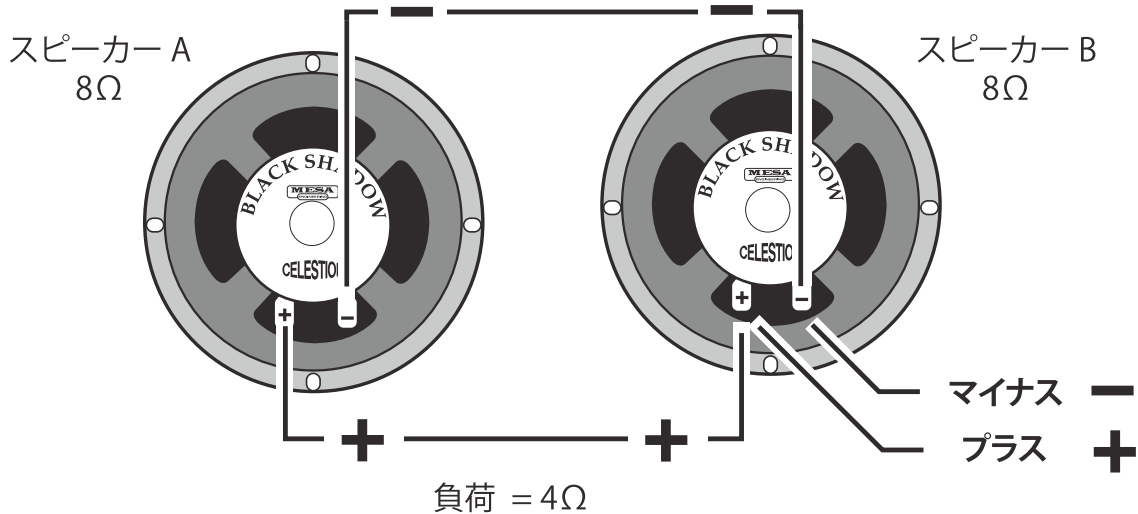


シリーズ (直列): スピーカー A のマイナス端子と
スピーカー B のプラス端子を接続

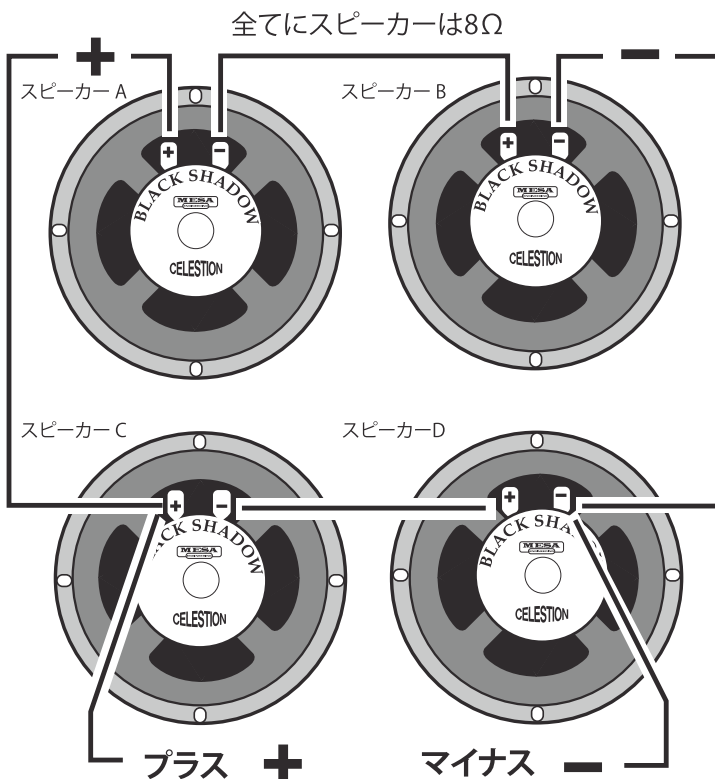
スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド(続き):

パラレル(並列):

スピーカーを並列に接続した場合、スピーカーの抵抗値は下がります。2台の8オーム・スピーカーを並列に接続した場合、負荷は4オームになります。接続するスピーカーが全て同じ抵抗値であれば計算は簡単ですが、異なる抵抗値のスピーカー(例えば、8オームと4オーム、16オームと8オーム等)を並列に接続する場合は、少しややこしくなります。計算式は、それぞれの抵抗値をかけ算した数値を、それぞれの抵抗値を足し算した数値で割ります。例えば8オームと4オームであれば、 $8 \times 4 \div (8 + 4) = 2.6666$ オームになります。パラレル(並列):スピーカーAのプラス端子とスピーカーBのプラス端子、スピーカーAのマイナス端子とスピーカーBのマイナス端子をそれぞれ接続。



シリーズ(直列)とパラレル(並列)の組み合わせ:



これは、2セットの直列接続したスピーカーを並列に接続する組み合わせです。ここで重要なのは、全てのスピーカーの合成抵抗値が低くなり過ぎてアンプに負担をかける様にする事です。

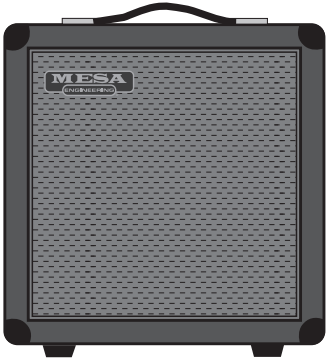
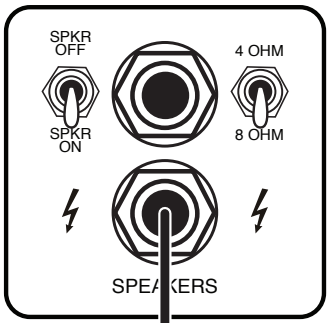
スピーカーAのプラス端子とスピーカーCのプラス端子を接続。

スピーカーAのマイナス端子とスピーカーBのプラス端子を接続。次にスピーカーCのマイナス端子とスピーカーDのプラス端子を接続。

そして最後にスピーカーBのマイナス端子とスピーカーDのマイナス端子を接続します。

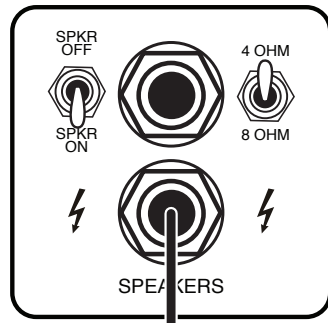
4台の8オーム・スピーカーをシリーズ・パラレル接続した時の合成抵抗値は、8オームになります。

接続方法-アンプからスピーカーキャビネットへ



①

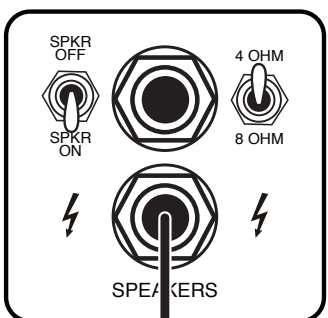
8 Ohm Cabinet



②

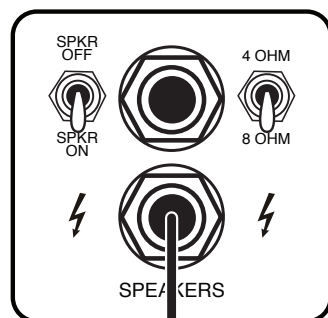
4 Ohm Cabinet

③



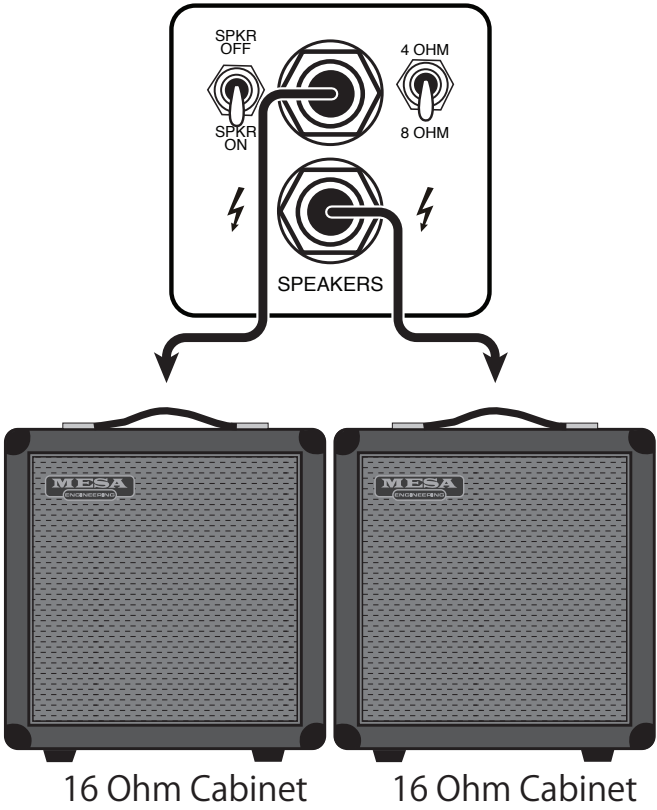
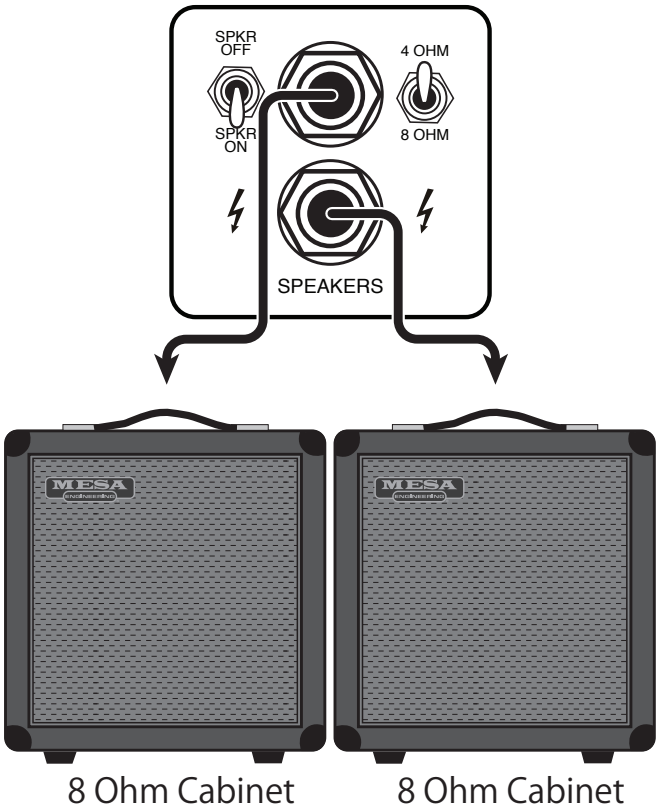
8 Ohm Cabinet
安全なミスマッチ

④

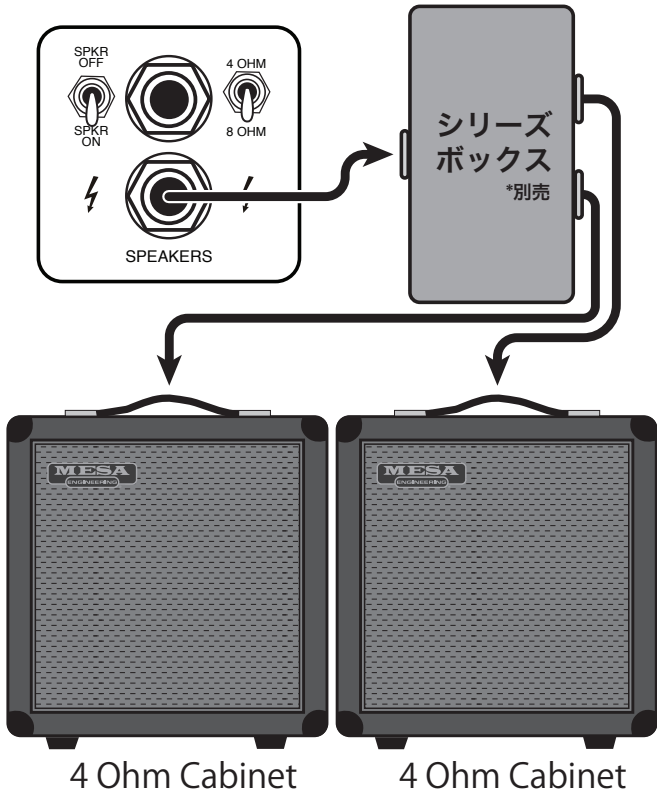


16 Ohm Cabinet
安全なミスマッチ

接続方法-アンプからスピーカーキャビネットへ

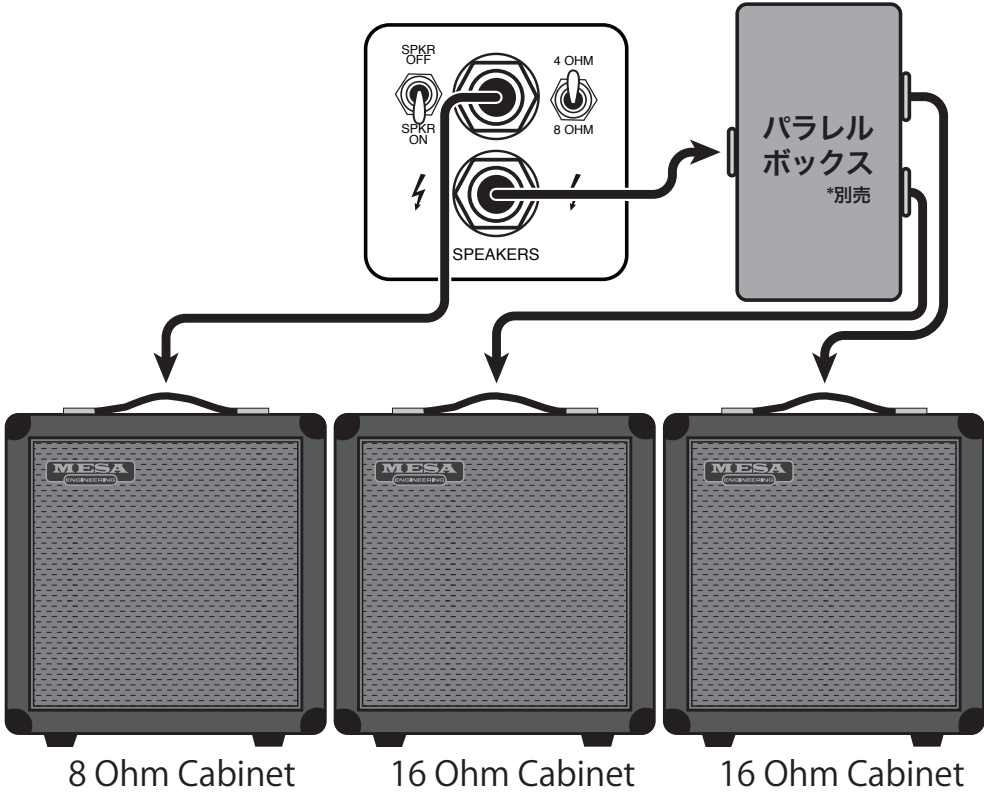


接続方法-アンプからスピーカーキャビネットへ

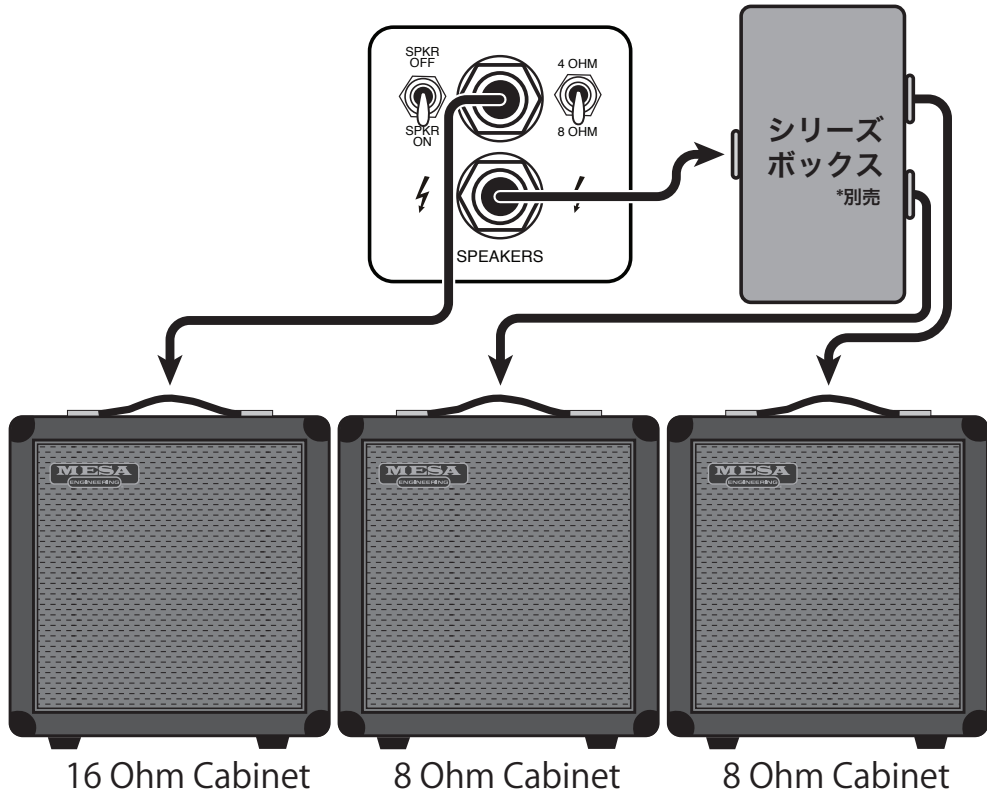


7

8



接続方法-アンプからスピーカーキャビネットへ

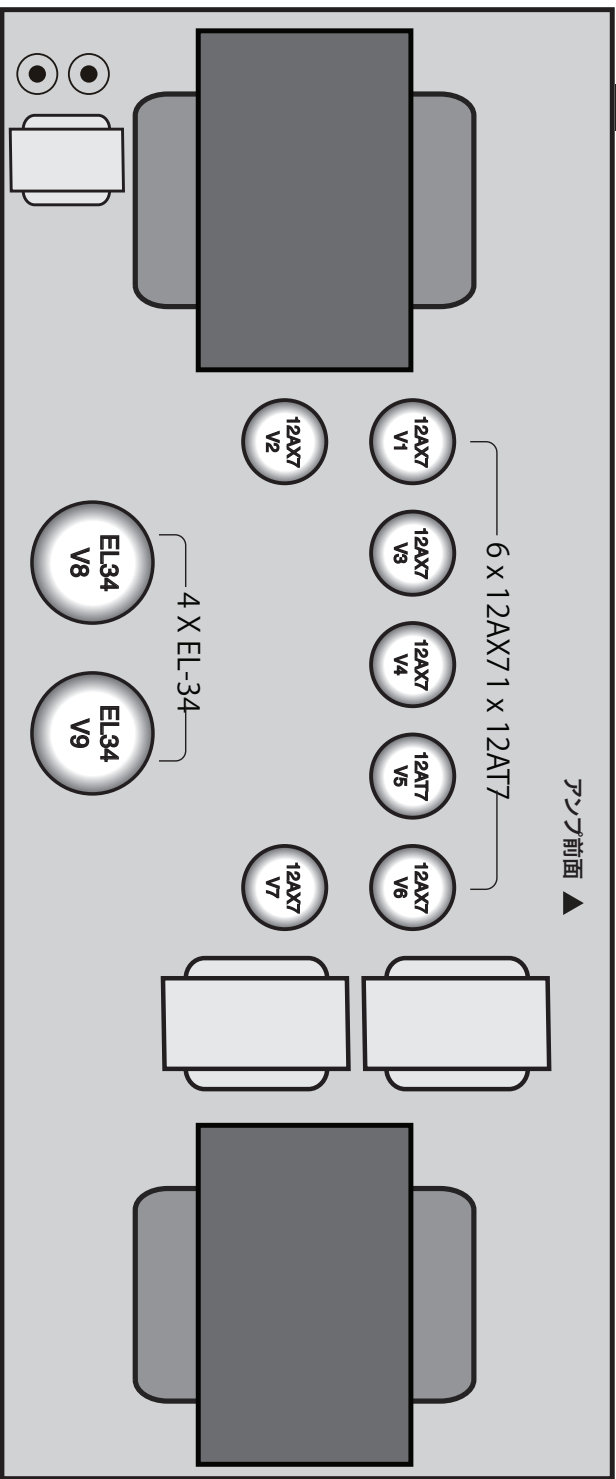


⑨

真空管を交換する前に、必ずPOWERとSTANDBYスイッチをOFFの状態にして下さい!

TRIPLE CROWN™ TC-50™ TUBE REPLACEMENT DIAGRAM

INPUT JACK

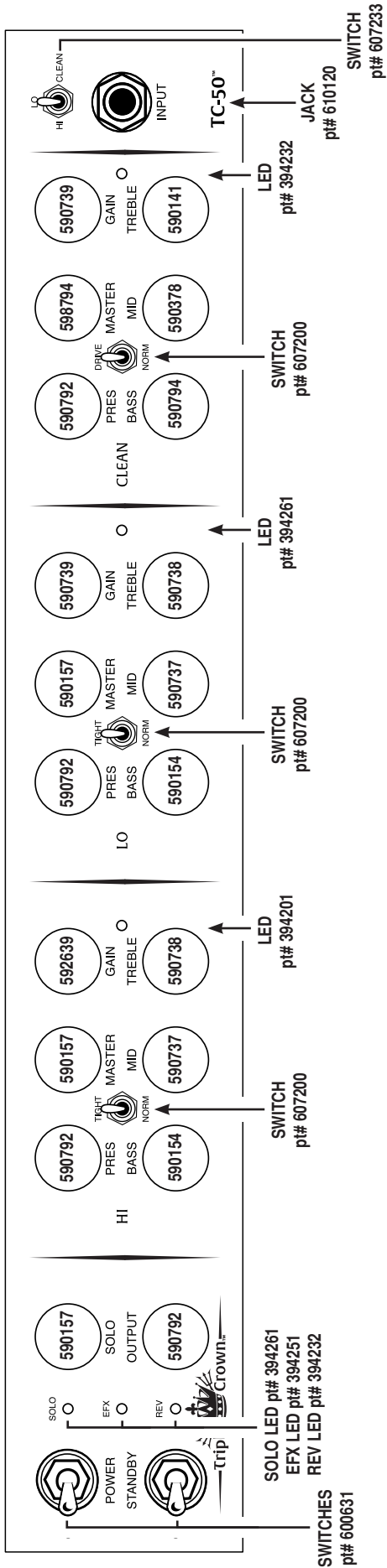


フリ管	
V1A - CLEAN 初段 GAINステージ	V5A - FXルーテ・セツト
V1B - CLEAN 第2段 GAINステージ	V5B - FXルーテ・リターン
V2A - CLEAN 第3段 GAINステージ	V6A - リバート・ドライテ
V2B - なし	V6B - リバート・リターン
V3A - HILO 初段 GAINステージ	V7A&B - ドライバート/フェイス インバート
V3B - HI 第2段 GAINステージ	
V4A - HI 第3段 GAINステージ/LO 第2段 GAINステージ	
V4B - HI 第4段 GAINステージ/LO 第3段 GAINステージ	

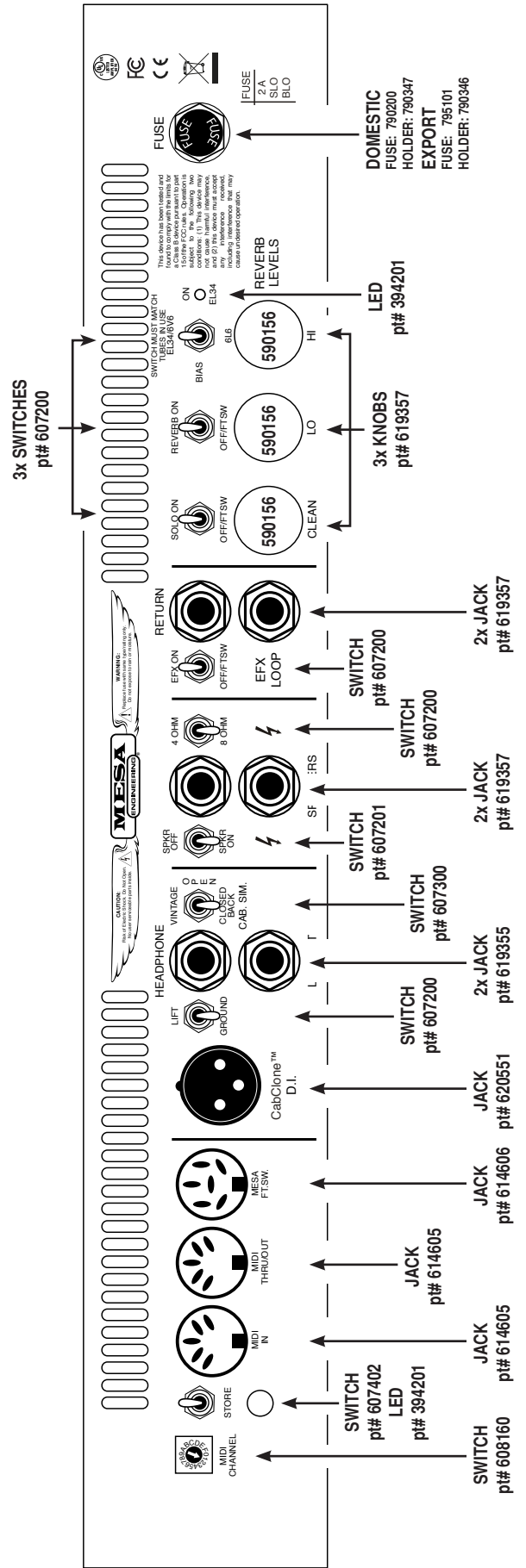
パワー管
50 Watts = V8, V9

FRONT PANEL: TRIPLE CROWN TC-50 (Head)

**ALL FRONT PANEL KNOBS
PT# 408640**



REAR PANEL: TRIPLE CROWN TC-50 (Head)



The Spirit of Art in Technology™



ギブソン・ブランズ・ジャパン株式会社

Email: service.japan@gibson.com

「@gibson.com」からのメールを受信できるよう設定をお願いいたします

お電話でのお問い合わせ窓口：0120-189433（通話料無料）

受付時間 9:30 - 17:00（土、日、祝日、年末年始を除く）